
緋弾のARIA 征服王の系譜

かるピス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 征服王の系譜

【Nコード】

N7326Y

【作者名】

かるピス

【あらすじ】

>殺し名<七名 序列四位、薄野武隊。その中でも最も正義を重んじ、正義のために人を殺した>黒い正義<。戦いの中で死んだ彼の二度目の人生は、アレキサンダー大王の子孫としてのものだった。殺人者の心を持つ彼は、どんな物語を描いていくのか。

戯言的暴力の世界（前書き）

二次創作、はじめました。

とりあえずこれは整理のために書いたんで、メンドクサイ、または、こんなもん常識だ！という方は、次からご覧ください。

戲言的暴力の世界

暴力の世界

＜六名
＞殺し名＜七名
＞呪い名

序列一位＞殺し屋＜ 匂宮雑技団 序列一位＞操
想術師＜ 時宮病院

序列二位＞暗殺者＜ 闇口衆 序列二位＞武
器職人＜ 罪口商会

序列三位＞殺人鬼＜ 零崎一賊 序列三位＞病
毒使い＜ 奇野師団

序列四位＞始末番＜ 薄野武隊 序列四位＞飼
育員＜ 拭森動物園

序列五位＞虐殺師＜ 墓森司令塔 序列五位＞死
配人＜ 死吹製作所

序列六位＞掃除人＜ 天吹正規庁 序列六位＞予
言者＜ 咎風党

序列七位＞死神＜ 石風調査室

根源を同じくする十三名の殺人者。

容赦はなく、慈悲もない。手段は選ばず、方法は問わない。

目的はあっても、目標は無く。標敵はいても、標的はいない。

依頼、忠誠、殺意、正義、仁義、潔癖、運命、呪い。

戦って殺す人外と。戦わず殺す人外。

見るな。聞くな。触るな。知るな。

もしあなたが、これからも生き続けたいのなら………

第一話（前書き）

この鼓動が、お前には聞こえないのか。

第一話

人生に、二度目があると思うだろうか？

私はこれまで、何人もの人生を終わらせてきた。

始末番として。薄野武隊の一人として。正義の体現者として。

何人もの命を奪ってきた。

反省などしていない。

私が殺したほとんどの人間は、自分の懷を肥やすことしか頭にない、自分以外の人間にはなんの興味もない。そんな人間だった。

周囲の人間が苦しむのを視界の端にも止めず、無辜の民から不当に金を搾り取る。そんな屑だった。

後悔などする必要もない。

私は私の信念をもって、私の使命を帯びて、彼らを殺してきたのだ。報復として、襲われたこともある。

プロのプレイヤー。他の>殺し名<の人外。時には>呪い名<の連中とも死合ったことはある。

そのことごとくを返り討ちにしてきた。

そのことごとくを皆殺しにしてきた。

零崎一賊ではないが、敵対するものは全滅させる。襲ってくるものは絶滅させる。

そうやって、私は私の正義を実現させてきた。

当然、殺し切れない者は出てくる。

私と死合つて逃走できるほどの、実力者。

数が多すぎて逃がしてしまった、強運な弱者。

そういった者達が、私の情報を広め、流し、漏洩し。

いつしか私は、>黒い正義などと呼ばれるようになった。

>殺し名<七名。その中でも影が薄い>薄野武隊<。その中から、目立つ人外が出てしまったのだ。

結末は、見えている。

あるいは、私が>零崎一賊<だったなら、あんな終わり方はしなかったのかもしれない。

あそこには、>自殺志願<やら、マインドレンデル>愚神礼賛<やら、シームレスバイアス目立つ人外がたくさんいる。

それに、>零崎一賊<の報復は凄まじい。誰も、手を出そうとは思わない。

まあ、そんな妄想をしても仕方がない。

出る杭は打たれる。

薄野の名から大きく飛び出してしまった私は、名も知らぬ少年によって討たれてしまった。

それだけの話だ。

十七歳くらいだっただろうか？

顔面に刺青を施した、背の低い少年。

お洒落の頑張り方が、いささか斜め上方向を突っ切ってしまったような、そんな少年だった。

……そして、全身が刃物でできているような、そんな印象を受ける少年だった。

『……あーん？なんだよ、兄貴かと思ったら全然知らねー奴じゃなかよ』

『ったく勘弁してくれよ。あの変態と気配がそっくりとか。傑作過ぎんぞ』

『あんたじゃあ、何かがどうにかなりそうな気は全くしないが、でもなーんか気になんだよなあ』

『まあいい。殺人鬼と殺人者が出会ったんだ。やることは一つだろ』

『殺して解^{バラ}して並べて揃えて　晒してやんよ』

彼との死合いは、語る必要もないだろう。

彼が生^{勝ち}き、私^{負け}が死んだ。

それだけの話だ。

……それだけの話、だったはずなのだ。

私は多くの人間を殺してきた。

死について、考察した時期もある。

そのときの結論、「死は死であり、死以外の何物でもない。死ぬ前には人生があり、死んだ後には何もない」は、死ぬまで私の理念だった。

今は、違う。

そんなことをほざく人間がいたなら、私は声高に否定しよう。

「死は死であり、死以外の何物でもない。死ぬ前には人生があり、死んだ後も道は続く」と。

そう、私のように。

最初に意識が覚醒した時、感じたのは浮遊感だった。暗い、暖かい空間で、独り、浮いている私。

やがて、周りの空間が動き出す。

頭が向いている方向へ、空間ごと流されていく。頭が何かにつつかえる。前へ進まなくなる。いまだ、私を押し出す力は無くなっていない。

なぜだろうか、いけると感じてしまった。

頭を前方に押し出す。頭蓋骨がへこんでいく。不思議と痛みはない。頭が、空間の外に出た。誰かの手が私を掴み、引っ張っていく。

（やたらと大きな手だな）

漠然と、そんなことを考える。不意に、私が今まで息をしていなかったことに気付く。ゆっくり呼吸する。肺の感覚が敏感で、少し驚く。

目を見開く。光が目突き刺さる。ぼんやりとしか見えない。ぼやけた視界の中、なぜか巨大に感じる人の姿を見ながら、思う。

(……ああ。私は生きているのか)

逸る心を抑え、速くなる足はそのままに、病院へ向かう。

なんとか仕事を終わらせ、現場を離れたのがついさっきだ。

別に驕るわけではないが、上に優秀な武偵と認識されていると、仕事量が増えて困る。

今現在、妻が病院に入院している。

別に病気や怪我ではない。子供ができたのだ。

腹も大分大きくなっている。生まれるのももう少しだそうだ。

病院の玄関に着き、中に入る。と、同時に聞こえて来る声。

「ジュード・イスカンドル様！ジュード・イスカンドル様はいらっしゃいませんか！？」

近づいて、声をかける。

「ジュード・イスカンドルは私だが？」

「ああ！もう！遅いじゃないですか！奥様の御出産がはじまっています！」

やけに馴れ馴れしいナースだと思ったが、台詞の後半を聞いたとたん、そんな気持ちは吹っ飛ぶ。

ザァッ、と血の気が引いてくるのが自覚できた。

私がない間に、出産が始まっていた？

本来ならば、夫が妻のそばにいて、励まさなければならぬというのに！

走って妻の元へ向かう。

あらかじめ教えられていた出産室に着いたときには、すでに息子の頭が見え始めていた。

「スズ！」

「うううー！痛い痛い！」

「頑張ってください！もう少しですから！」

ナースが妻を励ましている。負けじと、私も声を張り上げる。だんだんと、赤ん坊が生まれ出てくる。

やがて、完全に全身が現れる。

「生まれました！」

ドクターが叫ぶように言う。妻に駆け寄った。

「よく頑張った！」

「……………」

「本当にありがとう！私達の子供だ！」

「……………」

反応がない。

「…………スズ？どうしたんだ？」

「…………あの子、泣いてないわ」

妻の言葉に、バツ、と振り向く。

確かに、赤ん坊の泣き声が聞こえない。
ドクターに詰め寄る。

「おい！泣かせないとまずいんじゃないのか！？呼吸が……………」

「い、いえ。私もそう思ったのですが……………」

思っているのなら何故対処しない。そういつて掴みかかろうとした
のだが…………

「…………この子、既に呼吸をしています」

「…………なに？」

ドクターの腕の中の我が子を見る。

確かに、胸が上下している。しかし、そんなことがあるのだろうか？
泣き声をあげない赤ん坊など、いるのだろうか。

そして、私は見た。

我が子が、ゆつくりと目を開けるのを。

そして、私は幻^み視た。

我が子と同じ、赤い髪に青い目を持つ青年が、人を従えるのを。
我が子と同じ特徴を持つ青年が、人の上に立つのを。

そう、はるか昔の我が祖先、征服王イスカンドル、またの名を、マ
ケドニアの英雄、アレキサンダー大王のように。

第一話（後書き）

感想、アドバイス等、お待ちしております。

第二話（前書き）

絶望はことごとく暗いが、しかし希望がことごとく明るいとは限らない。

第二話

私が二度目の生を受けてから12年。
今までに色々な事があった。

……なに？時間が飛びすぎ？

わざわざ幼少時代をリアルタイムで流しても仕方がないだろう。
かいつまんで説明するでしょう。

《0歳》言わずもがなだ。

《5ヶ月》ようやく首が据わり、ハイハイができるようになった。

《1歳》ハイハイをしまくったおかげで、程よい筋肉がつき、立って歩けるようになった。

《1歳2ヶ月》舌が成長し、話せるようになった。
ちなみに、私が生まれた場所はインドだった。ヒンディー語が公用語で、たまに、英語、日本語が飛び交った。これは、父が英国人、母が日本人だったからである。

《2歳》鍛錬開始。やはり、以前と同程度の力は欲しい。

《2歳半》父に鍛錬が見つかり、袋叩き&六時間耐久説教を受けた。
幼児にする仕打ちではない。

指摘すると、お前のことは幼児とは思っていないと言われる。理不尽だ。

父のような武偵になりたいのだ、という途端に破顔。

翌日から稽古をつけてもらうことになる。……朝四時起きで。

幼児にする仕打ちではない。

ちなみに武偵とは、武装を許可された探偵のことである。

《3〜4歳》稽古。幼稚園に通っていたらしいが、記憶にない。

《5歳》ステルス超能力発現。

……いや、中二病などとは思わないで欲しい。発現したものは発現したのだ。

祖先のアレキサンダー大王も^{ステルス}超能力を持っていたらしい。

まあ、ファラオとして認められた人間だからな。持っていて不思議はない。

どうやら風を操る感じの能力らしいが、よく分からない。

《6歳》父の武偵の仕事の関係で、英国へ。

小学校も英国で入学。前世では通わなかったため、いい経験である。

……しかし父よ、王立特殊人類研究所付属小学校とは、どういうことだ？

《7〜9歳》鍛錬しつつ。勉強しつつ。能力開発しつつ。

あと、なぜか、同年代の子供から敬語を使われる。

《10〜11歳》うわなにをするやめ（ry

……そして現在、12歳である。

身体的には前世より数段劣っているが、技術的には勝^{まさ}っているだろう。

^{ステルス}超能力もある。^{グレード}Gは、16で定着したようだ。

現在扱える風の最大速度は毎秒30m。突風である。

いまさらだが、この世界、明らかに私の前世のものとは違う。

ステルス

超能力などという代物もあるし、武偵などという職業がある。歴史上で、アレキサンダー大王の血筋が途絶えていない。極めつけは、角を持つ人間（？）の存在だった。

王立特殊人類研究所。そこに、彼女はいた。

父に頼んで内部を見学していた私は、異常な光景を目にすることになる。

バサバサ髪の7歳位の少女。それが、研究所の中で両手足を固定され、拘束されている。

手術台のようなものの上で暴れているその子に、研究者然とした男がなにかを注射する。

途端にその少女は動きを止める。

わずかに痙攣しているところを見ると、強力な筋弛緩剤でも打たれたらしい。

完全に抵抗できなくなった彼女に対して、研究者達が薬品やらメスやらを取り出し始めたところで

オレハ、ブチ切レタ。

ヒサビサノ、>始末番くモードダ。

正義ノ為ノ人殺シヲ、決行スル。

『平伏せ《ヒレフセ》』

正直、あの時の事はあまり覚えていない。

ただ、満身創痍の父に、いざという時以外にはあの超能力ステルスは使うな、と言われた。

何か、新しい超能力ステルスに目覚めたらしい。

反省もしていないし後悔もしていない。ただ、父を傷つけたらしい事は謝った。

そしたら、拳骨を一閃された。謝った人間にする仕打ちではない。

父の拳骨は本当に痛い。洒落にならないくらい痛い。

なんでも、父はRランクに近いSランクの武偵だとか。

大きな実績を立てればRランクになれるかも、と言っていた。チートである。

殴られたこと理由を問えば、私がやらなければ、父がやっていたとか。

お前はお前の正義を貫いたのだろう？ならば謝る必要はない。

そう言っただけで笑いながら頭を撫でてくる父。

初めて父に尊敬の念を抱いた瞬間だった。

あの日以来、研究者達に恐れと好奇の目で見られるようになった。
2つの超能力ステルスを持つ小学生。彼らに興味を抱かせるには十分だったらしい。

変化はそれだけではなかった。拘束されていた少女 名は、ハビと言っただけでなく、が、なぜか私に懐いてしまった。父が手を回し、

開放してから、我が家に入り浸るようになった。

妹ができたようで嬉しかったが、しかし頭を腹に擦り付けるのはやめて欲しい。

角が挟りこまれて、かなり痛いのだ。

第六学年の、もうすぐ春休みと言う時期。

両親が死んだ。

否、殺された。

犯人は、以前父が捕まえた犯罪者の傘下のグループが雇った、プロのプレイヤーだった。

父一人なら死ななかつただろう。むしろ、プレイヤーをふんじばつて、組織ごと潰していただろう。

だが、父のそばには、母がいた。

私の話には出ていなかったが、気が強く、料理がうまく、綺麗で何より、優しい母だった。

まず、父が殺された。母を守ろうとして覆いかぶさったところでスナイパーライフルによって頭を撃ち抜かれたらしい。即死だ。母は、父の体を守ろうとしていたところで、心臓を撃ち抜かれた。即死だったことを祈る。

父が死んだことで、研究所への抑止力が無くなった。
私自身もそうだが、ハビが再び、研究材料にされてしまう危険性がある。

ハビは逃がし、私自身はロンドン武偵局に保護を願い出た。

ハビのことは気がかりだが、あてはあるらしいから大丈夫だろう。

これからは、ロンドン武偵局から資金援助を受け、ロンドン武偵高
付属中学に入学する予定だ。

ここから、私の武偵としての人生は始まる。

ジュード・イスカンドル。我が父よ。

あなたの息子は、必ず、武偵として頂点に登りつめる。

桜坂 おつさか 鈴菜 すずな。我が母よ。

最後まで、秘密を言い出せなかった。申し訳なく思う。

我が両親よ。

あなた方の息子、桜坂・イスカンドル・槐 エンジュ。

私は一人でも生きていける。どうか、安らかに眠ってくれ。

……ちなみに、両親が殺された翌日。

犯人のプレイヤーと、彼を雇った組織の全員が、死体で発見された。犯人は切り刻まれ。それ以外の人間は屋内で、まるで部屋の中で暴風が巻き起こったような惨状の中、圧迫されて。

どちらも激しい苦痛の中死んでいったような、そんな死に顔を晒していたらしい。

……不思議なことも、あったものだ。

第二話（後書き）

第六学年の、もうすぐ夏休みと言う時期。夏休み 春休み に変更。

イギリスは9月に学校が始まりますので、この時期に変更しました。

第三話（前書き）

目を見開け。これが現実だ。刮目せよ。これが頂点だ。

第三話

本日、ロンドン武偵高付属中学入学試験二日目。
私は陸上用のトラックを走っていた。

一日目に学力試験を実施。出来は……まあ、武偵に必要なのはその時々判断能力であって、学力ではない、とだけ言っておこう。必要な能力があればいいのだ。

そして、二日目。

二日目は体力試験である。

一応、銃火器の適正検査なども行っただが、大半は身体能力検査だ。まあ、つい最近までただの小学生だった者もいるのだ。妥当なところだろう。

試験に受かったとしても、まだ武偵ランクはつかないらしい。

現在は、身体測定、走り幅跳び、投擲、100m走が終わり、1500m走の最中である。

800mを越えた現時点で、2分10秒。鍛錬の成果は出ている。ブッチギリのトップと言いたいところなのだが、いや、実際、もうすぐ三位の者を抜く、というくらいのポジションなのだが。

一人だけ、私についてきている者がいる。

驚いたことに、少女である。

金糸のような亜麻色のツインテールを左右に振り、サファイアのような紺碧の瞳を苦しみに歪めながら、それでも私についてきている。あんな小柄な体のどこにそんな力があるのか、はなはだ疑問である。

今、三位の者を抜いた。一周差だ。
残りは500m。後三分の一である。少し、スピードを上げていこうか。

「ハッ。ハッ。ハッ。……ア、アンタ、何でそんなッ、平然としてんのよッ！」

1500m走を終え、水分補給をしているところに、先ほどの少女が声を掛けてきた。

どうやら、彼女は今走り終わったらしい。

タイムを見る。私が3分51秒。彼女が4分42秒。
ふむ。50秒差がついたか。

「……なぜ、と言われてもな。そもそも、私が走り終わってから1分ほど経っている。平然としていても不思議ではないだろう」

「ハッ。ハッ。あ、汗だつて、かいてないじゃないッ！」

「そういう体質なんだ」

どつという体質よ！と叫ぶ彼女を置いて、次の種目の会場に移る。

次は……水泳か。短距離、長距離、両方あるな。

相応にタイムを落とそうか。絡まれるのは遠慮したい。

「ほらっ！見なさいこのタイム。アンタより0・1秒速いわ！」

「そうか。素晴らしいな」

どやっ、とても言いたげな顔でタイム表を見せてくる少女。
見ると、クロールのタイムが0・1秒負けている。

「ねえ、今どんな気持ち？悔しい？悔しいでしょ？悔しいって言いなさいよ！」

「あーはいはい。悔しい悔しい」

限りなくローテンションで返す。

よし！とガッツポーズをとる少女。どうでもいいが、近い。

胸元近くに彼女の頭がある。彼女が私を見上げている格好だ。

しかし、この状況は何なのだろう。

絡まれないためのタイム落としによって、より一層絡まれている気がする。

まあいい。これで試験も終了だ。帰って両親に報告しに行くとしてよ
う。

更衣室に向かって移動する。と、

「ちょっと待ちなさい」

……また、少女が絡んでくる。

「……なんだ」

「名前、教えなさい」

……なぜ、いちいち上から目線なのだろうか。物理的に上から見ているのはこちらなのだが。

「必要ない。入試に受ければ、自然と分かるだろうしな」

言って、少女に背を向ける。これ以上、絡まれたくはないのでな。

「……それから、名を知りたいならまずは自分から名乗ることだ。人付き合いの基本だぞ」

背を向けながら、言う。そのまま行ってもよかったのだが、ささやかな心遣いと言うやつだ。

「ッ。アリアよ！神崎・H・アリア！」

神崎？日本名か。ハーフなのか。クォーターなのか。

「槐^{えんじゅ}。桜坂^{おうさか}・I・槐^{えんじゅ}だ」

名乗られたから、名乗り返す。
基本には忠実に、だ。

「ちよつ、ちよつと待って」

神崎が手を掴んで引き止めてくる。まだ何かあるのだろうか。いい

加減にして欲しい。
それに、

「……更衣室まで着いて来るつもりか？」

今私達がいる場所は、男子更衣室の前。
当然ながら、女人禁制である。

「ッ！」

パツ、と手を放す神崎。顔が、ぼつ、と赤くなった。赤面癖でもあるのだろうか。

更衣室に向かって歩き出す。

「あつ、ちよつ、ちよつと」

「じゃあな」

何かを言いかけた神崎に言い伏せる形で別れを告げる。
これ以上、絡まれたくはないのでな。

付属中学から出て、そのまま父と母の墓へ向かい、今日の報告をした。
そして、帰路につく。

今日の晩飯は何にしようか。

前世でも今世でも、料理などしたことがない。
デリバリーでも頼むか、なにか買っていくか。

そう考えてから、ふっと気付く。

私がいま暮らしているのは武偵局からの資金援助のおかげである。

資金援助といえば聞こえはいいが、ようは借金だ。

今回付属中学に入れば、学費の分も負担してもらわねばならない。
当然、生活費ももらえするだろうが……

「……カロリーメイトですか」

確か、父の部屋にダンボールで何箱もあった気がする。

武偵として仕事が出来ようになるまで、極貧生活だな、これは。

学力試験 233位 / 852人

体力試験 1位 / 852人

……今回の入試の結果である。

当然、合格。ロンドン武偵高付属中学入学決定だ。

試験を受けた852名のうち、420名ほどが同学年に入ってくる。

……入ってくる、のだが。

「…私が、学力試験233位、だと……」

驚きの結果である。

あの出来で、233位。他の人間の学力のなさがうかがえる。

本気で、武偵高が心配になってくるほどである（頭的な意味で）。

「……それで、だ。より問題なのはこちらのほうだな」

言つて、試験結果と同じ封筒に入っていた紙を一枚取り出す。

大きく書かれた見出しは『新入生代表挨拶依頼書』。

どうやら、体力試験で歴代有数の成績だったらしく、こんな面倒くさいものが送られてきていた。

「…いや、学力試験1位に頼むべきだろう、こんなもの」

そつだ。私のような脳筋がこんなことする必要はない。

早速連絡して、辞退しておこうではないか。

「……で、どうしてこうなった」

「いきなり何言つてんのよ。頭大丈夫？」

「大丈夫だ。問題ない」

いや、問題は大いにあるのだが。

今現在、ロンドン武偵高付属中学入学式、新入生代表の挨拶2分前である。

私は確かに辞退すると連絡したはずなのだが、なぜか直前に呼び出されて、ステージの舞台裏にいる。

私をどうしても演説台にあげたいそうだ。

……本当に、どうしてこうなった。

「アンタ、顔色が悪いわよ？本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない」

「具合悪いなら教師に言えば……」

「大丈夫だ。問題ない」

「……武偵憲章第三条は？」

「大丈夫だ。問題ない」

ダメだわこれ。と言いながら額に手をあてる少女。
金髪のツインテールに、紺碧の瞳。ちっこい体躯。
……どこかであったような気がする。

「……なあ、一つ聞きたいんだが」

正直に尋ねることにする。

なによ？と言わんばかりに、きょとんと首を傾げる少女。

「……どこかで、会ったことがあるか？」

「……………」

ビシッ、と固まる少女。だんだん顔が赤くなってくる。相当怒っているようだ。

「…ア、アンタ、ねえ……………」

再起動して、ちっさい体を震わせている。なにがそんなに気に障ったのだろうか。

「入学試験のとき名乗っ」

『新人生代表、学力試験一位、神崎・H・アリア』

「ひゃ、ひゃいいい!？」

何かを言いかけて、しかし司会進行役の教師にさえぎられる。

奇声に近い、不思議な返事を放つ少女。顔が真っ赤である。

ギッ、とこちらを睨んで、演説台へ向かう。

……何故私は、彼女にそんなに嫌われているのだろうか。

いや、別に好かれない訳ではないのだが。

少女が演説台に辿り着く。身長が小さいせいで、正面から見たら演説台の上においてある生首が喋っているように見えるのではないか？

『…私達、新人生426名は、此の度、ロンドン武偵高付属中学に所属する、武偵の卵となりました…』

代表挨拶を始めた。よどみない口調ですらすらと話していく少女。

……神崎、と呼ばれていたな。

『…勉強、鍛錬を怠らず、強い意思を持って…』

神崎、入試のときの絡み少女か。

身体能力も大したものだったが、学力試験で1位？優秀だな。
私の分も、代表挨拶してくれないだろうか。

『…武偵憲章にのっとり、よい武偵になることを目標に日々を歩んでいこうと思います。以上、新人生代表、神崎・H・アリア』

パチパチパチ、と拍手の音が響く。

次は私の番か。正直、何も考えていない。

『次、新人生代表、体力試験一位、桜坂・I・槐』

「……ハア……」

ため息をついて歩き出す。

前には、代表挨拶を終え、演説台の向こう側に移動した神崎と、司会進行役の教師が。

左には、一段低いところにびっしりと人が。
かなり、気が重い。

と、なぜか教師が出てきて、演説台を下げてしまう。

「……………」

神崎も、首をかしげている。

ステージの真ん中、何もないところで、私にどうしろと？

そして、次の瞬間。

私に向かって、敵意が叩きつけられた。

「!？」

後方上から4つ。どうやら、見えない場所に潜んでいたらしい。

真後ろに落下してくる相手にむかって、上段回し蹴り。

「ぐうえ!？」

感触からして、鳩尾に入ったようだ。

次、私が振り向いた状態で、私の左方に着地した者に、掌底。顎を打ち抜く。

残り2人。

右方を向いて、正面にいる者に上段蹴り。

腕でガードしてきたところで、二段蹴りに移行。

ガードの上から頭を蹴り抜いた。

ラスト。

蹴り抜いた状態で不安定なところに殴りかかれる。

相手の腕を掴み、勢いはそのままに。

後ろをむいて、投げる。

ドンツ、と床に叩きつけた相手の喉に、隠し持っていたナイフを突きつける。

「……くっ、うっ……」

見ると、襲ってきた相手は全員制服を着ていた。

我々新人生と違うのは、胸のエンブレムくらいか。

どうやら、上級生のようだ。

「……どういっつもりだ？」

静かな、低い声で問いかける。

沸々と、怒りが湧いてきていた。

入学式という場での不意打ち。無礼にも程がある。

『あー、桜坂君。彼を放してあげてください』

話しかけてきた教師を見る。困ったような、失望したような、驚いたような、形容しがたい表情をしている。

……なるほど。上級生達こいつらは教師達おまえらの差し金か。
プツツ、と、何かが切れた気がした。

スツ、と音もなく立ち上がる。
上級生達を見る。

「…ひイツ!？」

「オイ、演説台ヲ戻シテイケ」

命令する。演説台が戻される。マイクが入っているか確認。
そして

ガンツ、と演説台の端を掴み、喋りだす。

『諸君。我らは、栄えあるロンドン武偵高付属中学はに入学する。そこで、だ。オレは一つ、諸君に聞きたいことがある』

自分を上から見ているような感覚。

『貴様らは、何を目的にここへ入ったのだ』

口が、止まらない。

『より正確に言うならば、貴様らは何を目的に武偵になる？武偵に

なつて、何をしたいのだ』

勝手に、喋り続ける。

『目的もなく、ただカッコいいから、などという輩は帰れ。親が武偵だったから、なんていう者もいない。』

いや、お前は後者に当てはまっているだろう、槐。

『明確な目標を持つ者。それを達成したいと努力する者だけが、本当の、本物の武偵になれる。』

『……なんて、偉そうに言ったが、オレの目標はごく単純。』

『正義を貫く。ただそれだけだ。』

『武偵憲章第三条、「強くあれ。ただし、その前に正しくあれ。」
単純明快。すばらしく簡単なことだ。』

『自分の信じる、自分の正義を遂行する。遂行できるだけの力を持つ。』

『それが、オレの目標だ。』

『諸君にも、自分の信念を持ち、信念を貫く努力をしてもらいたい』

『以上、新入生代表、桜坂・I・槐』

言い終わって、一礼。

下がって、神崎の横に行く。遅れて響く、拍手と歓声。

ロンドン武偵高付属中学。

入学式で既に、波乱の学園生活が垣間見えるようである。

第三話（後書き）

想像してください。

水着姿で、自分のタイム表を一生懸命こちらに見せようとしてくる、
上目遣いのアリア。

……ぐはッ!!

な、なんという破壊力……！

第四話（前書き）

身無し子が見做した実無しの白薇^{みなしこ}

第四話

カーテンの隙間から朝の日差しが差し込む。
備え付けのベッドから体を起こし、ストレッチを始める。

現在、朝の4時。早朝である。

トレーニングウェアに着替え、ドアを開けて外に出る。
階段を降り、寮の前の道に出ると、2、3度軽くジャンプして、走り出す。

付属中学に入学してから、3週間ほど経った。

今日は9月23日。残暑が抜け出して、少し冷え込んできている。

入学式が終わった後、教師陣に呼び出された。

プチ切れた状態で赴くと、いきなり謝罪を受けた。

不意打ちの件である。

聞けば、あれは入学式の伝統だとか。

体力試験を一位通過した者を上級生達が叩き伏せることで、格の違いを認識させ、気を引き締めさせる目的だったと言う。

道理で、あの後の司会進行役の教師が妙にオドオドしていたわけだ。
予定を一つ、潰してしまった訳だからな。

60分ほど走って、寮の庭に戻る。

再びストレッチをした後、戦闘訓練。といっても、一人で出来ることなどたかが知れている。

シャドーで突きや蹴りを放ったり、ナイフ捌きを練習したり。

瞬発力強化のダッシュをしたり、壁と壁の間で連続三角跳びをした
り。

いつものメニューをこなしていく。

付属中学に入学したことで、寮の使用許可が下りたため、以前の家を出て寮に移動した。

あの家は、一人で暮らすには広すぎるのだ。遠いしな。

6時まで鍛錬を続け、寮の部屋に戻る。

この時間になると、ちらほら、部屋から出て行く者を見かける。

銃の調子を見ながら、バッグを背負って出て行ったところを見ると、学校で射撃訓練でもするつもりらしい。

汗をシャワーで流し、制服に着替える。

カロリーメイトで飯をすませ、一般教科ノルマレの宿題を片手間で終わらせる。

一週間前に届いた自分の銃、短機関銃サブマシンガンのH&K MP5Kを取り出し、整備を始める。

私には銃を扱う才能がない。それは、ここ3週間の演習で十分に理解した。

そもそも、前世の、私が「黒い正義」と呼ばれていた頃には、銃など扱わなかったし、扱う意味も無かった。人外連中相手には通用しなかったからな。

だからこそ、短機関銃サブマシンガンという選択。

銃の腕が悪くとも、フルオートで弾をばら撒けば何とかなる。

まさに、数撃ちや当たる、だ。

整備を終え、腰のホルスターに装着。

防弾制服を羽織り、袖の内側に投擲用ナイフを左右五本ずつ仕込む。父の形見である、刀身が漆黒の、謎の素材でできたサバイバルナイフを右大腿部に装備し、登校準備完了。

現在時刻、7時50分。丁度いい時間である。

「……いつてきます」

父と母が死んでからも、どうしても言ってしまう一言を呟き、外に出る。

ロンドン武偵高付属中学での一日が、始まる。

「……ふう。やっと一般教科ノルマーレの授業が終わりか。午前一杯費やすのは
いかななものかと思うがな」

「しょうがないわよ。武偵を目指しているといっても、生徒全員が
なれるわけじゃないんだから」

昼休み。神崎とそんなことを話しながら、カロリーメイトをかじる。
最近、妙にカロリーメイトがうまく感じるようになってきた。中
毒だな、これは。

「で？あんたはこの後何するの？」

「……そうだな。超能力捜査研究科にでも顔を出すか」

神崎とはクラスは別々なのだが、初日とともに昼飯を食べてから、
なぜか飯を共にすることが習慣付いてしまった。

まあ、私も神崎も、自分のクラスでは孤立しがちだから、たいした

問題はないのだが。

というか、私が話しかけると、なぜか大抵の者が敬語で返してくる謎である。

「えー？また？あんたこの間もいつてたじゃない。なにしに行ってるの？」

「^{ステルス}超能力発動時の能力者の精神状態についての研究だ」

「…なにそれ」

「^{ステルス}超能力はいくつかの種に分類されているが、^{ステルス}超能力使用時に能力者の人格が豹変するケースが少なくない。かく言う私もその一人だ。故に、自分の能力を把握し、十全に扱えるようにするために、この研究は必須であり、現在^{SSR}超能力捜査研究科では生徒一人一人のデータを取って、詳細を把握しているところだ。具体的には、頭に電極を貼り付けた状態で能力を使用するところから始まり、使用中に会話をしたり、挑発したりすることで、どんな反応を示すかを」

「それ以上喋ったら風穴」

ガシャツ、とガバメントを構えて言う神崎。

「お前が聞いてきたんだろうに」

言って、カロリーメイトを口に放り込む。

まったく、興味がないなら質問をしないで欲しい。

「……ねえ、それっていつ終わるの？」

「さあな。気まぐれに顔を出しているだけだからな。そもそも、私の専攻は強襲科アサルトだからな。施設内に入るのにも時間がかかる」

「そ、そう、なんだ」

妙に気落ちしたような顔で言う神崎。

……なんだ？私が悪いのか？

「……なにか用でもあったのか？」

「え、い、いや、違うわよ！ただ、あ、あんたが一人で寂しそうだから、その……」

どもりまくって言っても説得力はない。

というか、大きなお世話だ。むしろ一人なのはお前だろうに。

「用があるなら、時間を作るくらいはできるが」

言つと、パツ、と顔を明るくさせる。

本当に感情が表に出やすい奴である。

「あ、え、じゃ、じゃあ、三時半に強襲科アサルトの校舎に来なさい！」

「了解」

もはや聞きなれた命令口調に、苦笑して返す。

では、予定も出来てしまったことだし、さっさと研究所に向かおうか。

現在時刻、3時50分。

神崎との約束時間の、20分オーバーである。まずい状況だ。

そもそも、教授が珍しく超能力捜査研究科あんなにいるから悪いのだ。

無駄な実験をいくつもやらされてしまった。風の操作による洗濯物の高速乾燥実験とかな。

こういうとき、連絡手段がないのは不便だ。携帯電話の購入を考えた方がいいかもしれない。

強襲科アサルトの建物の入り口が見えるくらいの距離に近づいた。

建物の前の空間で、神崎がきよるきよる辺りを見回している。

酷く不安そうで、焦燥した表情をしている。

…これは、一度謝ったくらいでは許してもらえないかもしれない。

「…神崎！」

「ッ！…あつ。……」

声を掛けると、ピッ、とこちらのほうを向いた。

不安そうな顔が一転。安心したような表情になり、次いで、下を向いてしまう。

前髪で顔が見えない。

「……ねえ、あたし、は、三時、半、に、ここへ、来る、ように、言った、わ、よ、ね？」

少しずつ言葉を区切って言う神崎。

ゆらあり、ゆらり、と、こちらに近づいてくる。

……やばい。怖い。

この私が、気圧されている、だと……！

「い、いや、すまない。本当に遅れた。すまない。ちょっと超能力^s捜査研究科^sのほうで。すまない。ちょっとしたアクセシデント^sがあつて。すま」

「もう一度すまないって言ったら風穴」

ガシャシャツ、とガバメントを2丁取り出す神崎。
謝っている人間にする仕打ちではない。

「いや、悪かった。今後連絡手段を作る。ごめん」

「……………」

反応がない。

「……………おい、神崎？」

「……………ぷっ」

……………は？

「……………ぷ、ぷふう！あははははははは！」

何を笑っているのだ、この女。

「お、おい」

「あははっはははは！あ、あんたが！ごめんとか！似合わない過ぎ！あははははは！」

……いや、こいつの笑いのつばが分からない。

「……ふう。あー笑った。久しぶりにあんなに笑ったわ」

「それは良かったな」

あれから神崎は5分間笑い続けた。

あそこまで笑われると、もはや怒りも湧いてこない。

「……で、だ。お前が笑い転げている間に、さらに時間が経っているわけだが」

「……あっ！」

今気付いた！とばかりに腕時計を見る。

現在時刻、午後3時55分。
もうすぐ4時である。

「よし！笑わせてくれたから、さっきの遅刻は許してあげる！」

「そいつはどうも」

適当に返事をするが、その実、心は安堵でいっぱいだ。
先ほどの神崎の怖さは異常である。

「さあ、じゃあ、行くわよ！」

「どこにだ」

「街の方に決まってるじゃない」

「……なにをしにだ」

「な、なにつて、その……。そ、そう！ママの誕生日プレゼントを
買いに行くのよー！」

「……ほう」

なるほど。何故私を誘ったのかは分らんが、では、行くとするか。

第四話（後書き）

問 9月23日はどのような日か、答えよ。

第五話（前書き）

君の回答は、完全に間違っているという点に目を瞑れば、概ね正解だ。

第五話

神崎とともに、ロンドンの街を歩く。

夕方前の、丁度いい気候の中、アクセサリーなどを見て回る。

「…なあ、神崎。一つ聞きたいのだが」

「なあに？」

妙に機嫌のよさそうな神崎に問いかける。
返ってくる返事も、どこか上の空である。

「なぜ、私を誘ったのだ？」

「な、何故って、さっきも言ったじゃない。今日は誕生日イ……じやなくて、ママの誕生日プレゼントを買いに行くのよ！あんたにも選ぶの手伝わせようと思って」

「……そうか」

何故一度言い直したかは不明だが、一応納得した振りをしておく。

「ふむ。ならば、お前の母は、どんなものが好きなのだ。どんな趣味を持っている？」

「うーん。そうね。可愛いものが好きかしらね。趣味は…趣味は…あれ？」

あたし、趣味なんてあったかしら？と首を傾げる神崎。

いや、お前の趣味を聞いているわけではない。
それに、可愛いもの、とはな……

「…本当に、どうして私を誘ったのだ。可愛いものなど門外漢だぞ。
女子の友人にでも頼めば…」

「……い…もん」

「？ なんだ？ もう一度頼む」

「いな……もん」

「すまない。もう一度だ」

二度聞き返すと、バツ、と顔を上げて直視してくる神崎。
既に顔が赤くなっている。

責めるように私を睨みつけるその目には、わずかに涙が溜まっていた。

「女子の友達どこるか、あんた以外の友達なんていないわよ！ 悪かったわね！」

……まさかのカミングアウトである。

反応に困る。いや、反応しなければ今にも泣いてしまいそうなのだが。

「…あー。その、なんだ。すまなかった」

「謝るなあ！ もっと居たたまれなくなるでしょうが！」

どうしろというのだ。

「…えー。その、なんだ。心配するな。私も友人らしい友人はお前
しかない」

「ぶつちやけるなあ！寂しい者同士が仲良くしてるみたいに聞こえ
るでしょうが！」

……割と、真実をついていると思うが。

「…あー、うん。よし。では、探そうではないか」

強引に、話題を変える。

「……なにを？」

いまだ涙目で聞いてくる神崎。

いい加減涙を拭いて欲しい。体裁が悪すぎる。

「決まっている。お前の母が気に入るような可愛いものを、だ」

「これはどうだ」

言って、差し出すのは首だけの狐の剥製。

「なんで誕生日プレゼントで狐の首なんてもらわなくちゃいけない

のよ。次」

「ふむ。では、これは」

熊の足が原材料の、大きめの傘立て。

「不気味で使えないわよ。次」

「では、これは」

ゴリラの手でできた、足拭きマット用の重し。

「動物系から離れなさい。次」

「これは」

ミイラの粉末。

「何に使うのよ。次」

「これは」

6つ目のドクロ型水晶。

「キモい。次」

「これは」

「次」

「これは」

「次」

「これは」

「次」

「これは」

「次」

「これは」

「次」

・

・

・

・

プツッ。

「オレニドウシロト!？」

「普通のものを選びなさいよ!」

……おっと、いかんいかん。プツンきてしまった。

「……だから、門外漢だといっただろう。普通の基準が分からないんだ」

大きめのアクセサリーショップ。その一角に、私と神崎はいた。

提案しては却下され、却下されては提案し、再び却下。
これがループしている状態である。

……というか、この店は何なのだろう。品揃えが神秘の領域に達している。

「普通の基準が分からないんだ。じゃないわよ！店に入った途端直
行したのが『気運上昇！パワーアイテム』の棚ってどういうこと！
？」

「女性はそういった迷信まがいのものが好きだと聞いたのだが」

「誕生日にこんなゲテモノ贈られて喜ぶわけないでしょ！」

……ゲテモノ。そうか、これらはゲテモノだったのか。

この『わら人形型正義感上昇ネックレス』なんていいと思ったのだ
が。

つけているだけで本人の意思に関係なく正義感が上昇するとか。
誰だこんなピンポイントなものを仕入れたのは。買うわ。

「……ならば少しは自分で探せ。さっきから私に選ばせてばかりで、
お前は何一つ選んでいないではないか」

そう。自分の母親の誕生日プレゼントを選ぼうというのに、神崎は
自分で選ぼうとはしていないのだった。

「あ、あたしが選んでどうするのよ！」

「どうするって、お前の母に贈るのだろう？」

「え、あ、そ、そうね。うん。そうだわ」

変に焦って返事をする神崎。

斜め下を向いて、……気付けバカ。と小さな声で呟いている。

……何にだ。

「……ハア。では、お前が良いと思ったジャンルを教えてください。そこから選ぶとしよう。」

「……はあ。結局そうなるのね。うん。本当は分かってたけど」

……何をだ。

最終的に、神崎の母へのプレゼントは、子供くらいの大きさの犬のぬいぐるみに決まった。

あの後神崎が私をぬいぐるみのコーナーへ連れて行き、そこで私に選ばせたものだった。

「あーあ。最初思ってた計画とは大分ずれちゃったわね。まあ、楽しかったから良いけど」

現在時刻午後6時。

寮の門限の時間が近づいている。

「計画？なんだ、そんなものがあつたのか？私に教えてくれているも良かっただろうに」

「あんたに教えちゃダメだったの！」

なんだそれは。

歩みを進める。辺りはもうかなり暗くなってきた。
万が一、ということもないだろうが、礼儀として、私が神崎を送っている最中である。

女子寮の前に着く。神崎は、実家は近くにあるのだが、親族とうまくいってないらしく、寮に住んでいるのだった。

「……槐」

神崎が私を呼ぶ。なにやら、思いつめたような表情である。

「なんだ」

「……うつん。なんでもない。じゃあ、また明日！」

言って、寮に戻っていく神崎。では。私も帰るとするか。

……つと。そつだ、忘れていた。

「おい、神崎」

女子寮に入る寸前だった神崎を呼び止める。

「？ なに？」

「ほら」

小さい包みをポイツ、と投げ渡す。

「わっ！と。……………これ、なに？」

「ああ。少し前に装備科アムドに依頼したものが、丁度今日届いてな」

「泊置く。さて、喜んでもらえれば僥倖だが。」

「13歳の誕生日、おめでとう。神崎」

ぽかんとした表情。

次第に意味が掴めてきたのか、頬が紅潮し始める。口が、あうあうと、声にならない声を発している。

「しっ、知ってたの？」

「……知っていた、というか、授業開始初日に、お前から言ってきたのだが」

「そうだったけ？」

「そうだ」

ふふっ、と神崎が笑う。

「なーんだ。あたし、もう自分で言ってたのね。ねえ、開けていい？開けるわよ？開けちゃった！」

私の返事を待たずに小包を開ける神崎。中に入っているものを取り出す。

「これ………髪飾り？」

小包の中身は、ヘアピンに近い、朱色の簡素な髪飾りである。

「ああ、お前の髪に映えると思ってな。しかし、当然、ただの髪飾りではない。10m程の極細のワイヤーと、極小の刃物が出るよう

になっている。武偵らしくな」

「普通のプレゼントは渡せないのか、あんたは！」

突っ込む神崎。

……割と、便利だと思うのだが。

「……ふう。でも、まあいいわ」

髪飾りをいじりだす神崎。

内蔵されているギミックを出し、使い心地を確かめている。

やがて、本来の用途である、髪を押さえるという使い方をして、うん。と頷き。

「気に入ったわ。ありがとう」

ふわっ、と年相応の女の子らしく微笑む。

「……それは、なによりだ」

贈った甲斐があったというものだ。

「じゃあ、今度こそ、また明日！」

「ああ、ではな」

別れを告げて、寮の方向に歩き出す。

さあ、明日も、勉学に励むとするか。

第五話（後書き）

はい、というわけで、前話の問の答えは、

答・アリアの誕生日 でした。

第六話（前書き）

俺の世界は最高だ。

第六話

ロンドン武偵高付属中学に入学してから、もう大分経った。
もう少いで、進学の時期である。

入試で体力部門の一位を取り、入学式でも前代未聞の上級生狩りを成し遂げた私は、マスタース教務科でも話題になっていたらしく、何かと便宜を図ってもらうことが多くなっていた。

インターン中学では、本来ならば1年は、武偵としての仕事の依頼は受けられないのだが、特別枠として、依頼を受けることが出来るようになった。

……あれか、教育と称して絡んできた上級生8人を、一撃も入れさせず沈めた件がよかったのだろうか。

ともあれ、依頼の受注開始である。

請け負うことができる仕事は、まだ低ランクのものばかりだが、しかし。

金が、入ってくる。

収入源が出来たのである。

これ幸いと、いくつもいくつも依頼を受け続けた結果、現在の武偵ランクはDランクとなっている。

ステルス超能力開発のほうも順調である。

以前は、普通の状態では風の操作しか出来ず、怒りが一定以上に達した状態、つまり、キレてはじめて二つ目の能力が使える、といった有様だった。

が、研究の結果、私が前世で、>始末番くとして動いていた時の状

態に近づけば、二つ目の能力が発動するということが分かった。
そこで、まずは形から入ろうということ、> 黒い正義くと呼ばれていた頃に着ていたものに似た、黒い外套を探し出し、実験時に着用してみた。

すると、キレた状態でなくともある程度能力の使用が可能になり、さらに風の速度も増した。

……我ながら、単純な精神構造である。

そんな具合で、順風満帆な学園生活を送っていた頃。

一つの凶報が、私の元に飛び込んだ。

いつも通り、一般教科ノルマーレの授業が終わり、今日はどうしようか、依頼を受けに行くか、強襲科アサルトで訓練でもするか。そういえばここ4日ほど神崎に会っていないな、などと思っていた時。

二人の生徒の会話が、耳に入った。

「……それにしても、貴族サマってのもいいことだけじゃねえんだなー。おっそろしい」

「本当だよ。誰が犯人かとか、まだ分かってないらしいけど、神崎さんも災難だったよ」

……神崎が、災難？

「おい、その二人」

気がついたら、声を掛けていた。

「あ？なんだ…よ……って、お、桜坂くん…い、いや、さん！な、何でしょう！」

こちらを振り向いた瞬間、直立不動で敬語を使ってくるクラスメイトA。

何故そんな態度をとるのか、聞いてみたいところではあるが、まずはこっちだ。

「いや、会話を耳に挟んだのだがな。神崎が災難というのは……？」

「え、知らなかったんですか？」

驚いて言うクラスメイトB。だから何故敬語を使う。

「なんでも、母親の誕生日パーティーで、撃たれたとか何とか……」

答えるクラスメイトA。気がついたら、彼の肩をぐわし！と掴んでいて……

「……クワシク、キカセロ」

「は、はいいいー！」

走る、走る、走る。

アスファルトの道を踏みしめ、病院へ向かう。クラスメイトの話によると、5日前の夜、神崎の母の誕生日パーティーでの出来事らしい。

貴族らしく、盛大にパーティーを催している場での凶行。

犯人は、いまだに捕まっていない。

というか、どうもよく分からない事件なのだから。

狙撃でないのは、弾が45ACP弾 拳銃で用いられる弾である
 だったことから明白であるらしいのだが、パーティー会場は
 当たり前のように厳重な警戒態勢で、怪しい者は進入できない。
 パーティー会場の客も、銃器を持っている者はいなかったらしい。

……つまり、犯人が存在しえないのだ。

加えて、弾丸は心臓の真横に残ったらしいが、命に別状はなく、生活に支障もないとか。

……ありえない。

心臓の極近いところに弾丸を撃たれて、命に別状はない？心臓を貫かなかつたにしても、周りの主要な血管に傷がついてもおかしくない。むしろ、傷がつかないほうがおかしいくらいだ。
銃創以外に、大きな障害を負っていない。

……まるで、意図的に体内に弾丸を残したかのようである。

「……ちッ」

そこまで考えて、舌打ちする。

いまはまだ、判断材料が少なすぎる。

とりあえず、神崎に会うことが先決だ。

病院内に入り、窓口へ向かう。

「すまない。神崎・H・アリアの病室の場所を教えてもらえないだろうか」

早口にまくし立てる。

カウンターの内側にいる職員が、少し驚いたような顔をしている。

「え、あ、あの、神崎さんは現在面会謝絶で……」

チツ、と舌打ち。

制服の中を探り、目当てのものを取り出し、バツ、と突きつける。

「武偵だ。先日のもので呼ばれている」

取り出したのは武偵手帳。

嘘八百の口上も、武偵徽章のおかげで真実味が増す。

慌てて案内を始める職員の後ろについて、病室へ向かう。

病院内の、真っ白い廊下を早歩きで進む。

医療機関特有の静かな空間が、より一層不安を掻き立てる。

やがて、一つの病室が見えてくる。個室のようだ。

表札に、A r i a ・ H ・ K a n z a k i と書いてあるのが見える。

「ここまでいい」

案内役の人間に断りをいれ、小走りで病室に駆け寄る。
取っ手に手をかけ、思いつきドアを開ける。

「神崎！！」

思わず、叫んでしまった。

ベッドの上で上半身を起こし、きよと……とこちらを見ている神崎。

「……………槐？どうしたの？」

のんきそうな声に脱力……しかけて、違和感を感じて再び神崎を見る。

何か変だ。何か、変わっている。

つかつかと歩を進め、神崎の両肩に手を置く。

「え、ちよっ、え！？な、なに！？」

なにやら騒いでいるが、無視する。

細部を観察するために、顔を近づけていく。

「ちよっ、ちよっ、ちよっ！ま、待って！いきなり！？」

顔を逸らそうとしたので、右手であごを固定。無理矢理上を向かせ
る。

「……………あっ……………」

急に静かになったが、まあ、好都合である。

さらに顔を近づけ、なめまわすように観る。

「……………槐……………」

切なそうな声を出し、目を閉じていく神崎。
いまだ観察中だというのに、非協力的な奴である。

と、そこで気付く。

神崎の、綺麗な紺碧色をしていた瞳が、微妙に、赤みがかったいる。

「……………神崎……………」

「……………うん。いいよ……………」

お前、目が、と続けようとして、謎の許可を出される。
何がいいのだ？と聞こうとして、

「……………ごほん。二人だけの世界に入るのは結構だけど、わたしがいない所でしてね？」

病室内にいる、もう一人の存在に気付いた。

第七話（前書き）

叶えてやろう。貴様の願いを。

第七話

「この子の母である、神崎かなえです。あなたの事は、娘からよく聞いているわ。桜坂くん」

全身真っ赤にして、うみゅうう、と意味不明な唸り声を上げている神崎。

そんな娘の横でにこにここと自己紹介をする、かなり若く見える女性。

……彼女が神崎の母親？嘘だろう？ということは、かなり若く見えるが、実際は……

「……桜坂くん？なにを考えているのかしら？」

おだやかな声で尋ねられた、その瞬間に強張る私の体。

この気迫、確かに神崎の母親である。どんな風には言わないが。

「……い、いや。美しい女性だと感心していたところだ」

「あら、お世辞でもうれしいわ。ありがとう」

ふふつ、と笑う神崎母。

ひとつの危機を乗り越えたようである。

「本当に、アリアと仲良くしてもらっているようで。中学校に上がってから、この子、前より生き生きしたのよ。あなたのおかげね」

「……はあ」

曖昧に返事をする。神崎が、ふみゅっ！？、と反応するが、無視する。

ふふふっ、と笑う神崎母。

「この間も、アリアが一生懸命、槐がね、槐がね、って言うてくるものだから、わたしもうおかしくて」

「ママっ！それ以上言っちゃダメ！！」

いまだに赤く染まった体を、バツ、とかなえさんに向ける神崎。

……いや、いつもの赤面癖だけではない。

実際に、紺碧色だった瞳と、金糸のようだった髪の両方が、少し赤みがかっている。

「……………なあ、神崎」

呼びかけると、あわあわとかなえさんに弁解していた神崎が、私に注意を向ける。

「え、槐！べ、別にあんたのことなんてなんとも思ってないんだからねっ！」

「ツンデレか貴様」

思わず突っ込んでしまった。

私の言葉に、元に戻ってきていた神崎の肌が、また赤くなっていく。

……どれだけ血行がいいのだ、こいつ。

「ツ、ツ、ツンデレじゃないわよ！ホントにあんたのことなんてど

うでもいいの！」

「あら？でもさっき、いいよ、なんて言ってた気が……」

「あ、あれは！あれは違って！そういうのじゃなくて！」

楽しそうに神崎をいじっているかなえさん。本当に、親子というより姉妹といった感じだ。

「二つ、聞きたいことがある」

会話を打ち切って、話を進める。

二人とも、急に真険になった私に気圧されるように、口を閉じる。

「まず一つ目。背後から撃たれた、という話だったが、もう大丈夫なのか」

「あ、うん。弾丸は手術でも取り出せないけど、それ以外は問題はないって。すぐく運がよかったって医者が言ってたわ」

「……運、か」

いったいどれだけの確率だろうか。

背後から撃たれて、大きな血管を少しも傷つけず、弾丸が体内に残るというのは。

狙っていても、そうそう出来るものではない。

私には不可能である。

となると、

「………本当にただの偶然か。それとも非常識なほど腕のいい銃師ガンナー

か……………」

「え？なに？」

「いや、なんでもない」

前者でも後者でも、現状では大した違いはない。

真相が分からない以上、より警戒を強化するくらいのことしか出来ないからな。

「とりあえず、無事でよかった」

「無事ではないけどね。背中に傷が出来ちゃったし。お嫁にいけないようになったらどうしよう！」

冗談めかして言っているが、神崎の顔は暗い。

男ではあまり気にしないが、やはり少女らしく気になるらしい。

「安心しろ。その時は私がもらってやる」

「……………っえ！？そ、それって」

「二つ目の質問だが」

こちらが本題である。

「……………その目と髪、どうしたんだ？」

「……………うん」

聞いた途端に、沈んだ顔をする神崎。

…… 本当に、感情が表に出やすい奴である。

「…………… 医者の話だと、撃たれたショックで、色素を作り出す機能に異常が生じたのかもしれないって。原因はよく分からないみたいだけど」

「…………… そうか」

撃たれたショックで異常が生じた。

過度の恐怖やストレスで身体に異常が出るケースは結構多い。

実際、前世でも恐怖によって毛髪が白くなった少年を見たことはあるが。

しかし、紅くなるというのは何なのだろう。

恐怖によって色素が作れなくなるというのならまだしも、それまで無かった、存在しなかった色が作られるようになるなど、あるのだろうか。

「…………… ごめんね、槐」

と、そこで神崎に謝罪される。

何についての謝罪なのか分からない。

「何について謝っているのだ。謝られる覚えがないが」

それとも、私が知らないところで何かしていたりしたのだろうか。黙って私のカロリーメイトを完食するのかな。

…… 許さん。

「あ、あたし、こんな髪になっちゃって。前にくれた髪飾り、この

色じゃ、うまく映えなくて」

つかえつつかえで話す神崎。鼻声である。
泣き出してしまうまで秒読みといった感じだ。

「だ、だから、その、ご、ごめん、ね？」

すまなそうに、不安そうに私を見る神崎。

青紫色になったその瞳に、大粒の涙が浮かんでいる。

……なんだ？私が悪いのか？

「気にするな。というか、そもそもお前の責任ではない。お前は被害者で、謝る必要はなく、故に泣く必要もない。分かったか？」

出来るだけ刺激しないよう、そっと、優しく言ったのだが……

「……………っ、……………っ！」

ぽろっと、大きなまるい瞳から、涙が零れ落ちてしまった。

『せっかく来てくれたのに、こんな別れ方になっちゃって、ごめんなさい』

学校に戻りながら、先ほどのことを思い返す。

『やっぱりあの子も辛かったみたいで、今日あなたに会って、それがふき出しちゃったみたい』

神崎はあの後も泣き続け、結局私は、部屋から退出することになった。

『いろいろ手がかかる娘だけど、ねえ、桜坂くん』

『あの子を、よろしくね？』

「…………ふう」

よろしく、か。

人から人のことを、人らしくよろしくされるのはこれが初めてである。

前世では、そんな機会は無かったからな。

私は、いつから、こんなに穏やかで平穩で、親から子のことを頼まれるような人間になったのだろう。

殺人者である私に、どうしろというのだ。

確かにここ最近、誰一人人間を殺していない。

そもそも、私は快樂殺人などしたことはない。全て、正義のために、正義のためだけに人を殺してきた。

しかし、人を殺すのに忌避感などない。

殺す必要があれば迷わず殺す。殺す理由があれば躊躇わず殺す。

生まれ変わったとしても、姿が変わったとしても、そこは変わらない

い。

依然として、残っている。

> 殺し名くとしての、> 薄野武隊くとしての、> 黒い正義くとしての私は、いまだに生き残っている。

そんな私が、はたして、今までのまま、今までと変わらないまま、神崎と接していいのだろうか。

そこまで考えて、思考を止める。

というか、止めざるを得なかった。

殺人者としての私はいまだに生き残っていて、殺人者としての習慣も依然として残っていて、だから、無意識のうちにサバイバルナイフを手握っていても、なんらおかしい事はない。

今私が歩いている道に、人がいなくてほっとするが、それも今はどうでもいい。

私が抜き放ったナイフは、父の形見であるナイフで、だから、刀身は、謎の、どんよりと黒い金属で出来ているはずだった。

いま、私が抜き放っているこのナイフ。
どうして、

どうして、緋色に輝いているのだ？

第八話（前書き）

さあ。はじめよう。

第八話

例えばの話をしよう。

例えば、謂れない理由で、街の住民達から嫌われているような人間がいたとして。

彼、もしくは彼女もまた人間のことが嫌いであり、極力、住民達と接しないようにしていたとして。

例えば、その街の有力者で、誰にでも分け隔てなく見下した態度をとり、住民に理不尽な重税をかけている人間がいたとして。

その人間が、住民からかき集めた税で豪遊し、贅沢し、自分のためだけに金を使っていたとして。

それでも、そんな中でも、住民達はその人間に従わなければならなかったとして。

その人間に、住民達が、深い、それこそ、恨みの域に達するくらい深い憤りを感じていたとして。

例えば、その有力者が、突然、何者かに暗殺されたとして。

そして、例えば、有力者を殺した責を、嫌われ者の彼、もしくは彼女が、負わされたとして。

彼、もしくは彼女が、抵抗もせず、黙って責を受け入れたとして。

真犯人は、はたして、どのような考えを持つだろうか？

街のためを思い、民のためを思つて有力者を殺したというのに、責を負わされたのは何の罪もない住人。

正義のために行動し。正義のために殺人し。

その結果、何の罪もない人間が、自分の代わりに責を負つたとして、それでもその暗殺者は、正義を決行しきつたと言えるのだろうか？

話が少し長くなつたが、結局、私が何を言いたかつたのかというと。

ここまででは、^{プレリユード}全て序章に過ぎなかつたということだ。

「…………ハアツ、ハアツ、ハアツ」

狭く暗い路地の中を、一人の男が、焦つた様子で駆け抜けていく。

「…………クソツ！なんでこんなことになつてんだよ！！」

ニット帽にサングラス、マスクをつけた、怪しい風貌をした男。もちろん、彼は日常的にこんな格好をしているわけではない。今回は、ある目的があつて、このような格好をしていたのだ。

「途中までは！途中まではうまくいったのに！！」

そう、彼は先ほどまで、仲間の男達とともに、銀行強盗に勤しんでいたのである。

マスクも、サングラスも、ニット帽も、全て素顔を見せないための手段であつた。

「あの二人が現れてから、全部おかしくなりやがつた！！」

銃を手に入れ、逃走ルートをいくつも用意し、何度も下見をし。失敗する可能性は限りなく低かつたはずなのに。

『あら？なに、ここの銀行。こんなパフォーマンス開いてたの？』

『阿呆か貴様。銀行強盗の現場に決まっているだろう』

突然現れた二人。

炎のように紅い髪と、深い海のような蒼い目を持つ少年。

珍しいピンクブロンドの髪と、綺麗な赤紫色カメリアの目を持つ少女。

彼らが現れてからほんの数分で、男達は成功者から逃亡者へとかわつた。

「……………畜生、なんなんだ、あの餓鬼共！」

走り続ける男。

他の仲間はどうなっているか分からない。
各自で逃げているか、何人が捕まったか。

やがて、路地の向こうが明るくなってくる。

大通りに出ようとしているのだ。

男にはそれが、自分の逃亡の成功を祝福する何かに思えた。
走って、走って、そして、大通りに着き、満足げな笑みを浮かべる。

「……………ハッ。ハアッ！よ、よし。ここまでくれば……………」

……………それが、自分の刑務所への誘いだとは知らずに。

「ここまでくれば、なんだというのだ」

バツ、と顔を上げる男。

視線の先には、緋色のサバイバルナイフを逆手に持ち、黒い外套を着た少年の姿が。

「……………つくそ！なんで、なんでテメエみたいなのがあそこにいたんだ！」

錯乱したかのように叫ぶ男。

その顔には、絶望の色が伺える。

「なんで！テメエが！>真紅クリムゾン・リッパーのナイフ使いくが！俺達なんか追うんだ！？」

少年は、その声に反応したように、行動を開始する。

右手に持ったサバイバルナイフを胸の前に構え、ゆっくりと歩き始める。

「……………それはな」

いいながら、距離を詰める。

「私が」

近づいてくるのに気付いた男が、踵を返して逃げようとする。

跳躍。左右の壁を交互に蹴り、器用に男の目の前に降り立つ少年。

「武偵だからだ」

ナイフを振り上げ

「はーあ。もういやになっちゃう。何であんなところで事件に巻き込まれなきゃならないのよ！」

学校帰り。

なにか食べていこうということで、金を下ろしに銀行によった矢先で、事件勃発。

急遽目的を変更し、犯人を全員捕まえた時点で、もうすぐ寮の門限の時間である。

神崎もかなり不満そうだ。

「仕方がないだろう。まあ、^{マスターズ}教務科に報告すれば、それなりの評価はもらえるのではないか？」

「たいしたことないわよ、あんなの。この前の依頼のほうがやばかったし。そもそも、あんたがお金もってれば、巻き込まれないですんだのよ！」

「そうか。つまり私のおかげであの銀行は救われたと」

「前向き思考か！…まあでも、確かに被害者がいなかったのは良かったわね」

暗くなってきた道歩く。

歩幅がちいさい神崎に、私が合わせている形である。

「逆に良かったのではないか？女としては」

「……………それ、どういう意味？」

「あそこで食事をとっていれば、お前のちっこ細い体型が、ちっこ太いものにかわっていたやもしれん」

「風穴あけるわよ！」

銃声、銃声銃声。

「あーもう！避けるな！素直に当たりなさい！」

「遠慮する。痛いしな」

「っていうか、前々から思ってたけど、なんで弾丸避けれんのよあんな！」

「必須技能だ」

「……………それ、本気で言ってるの…………？」

分かれ道に着く。

ここで、男子寮と女子寮に道が分かれていく。

「一応、送っていくか？」

「いらないわよ。 > 双剣^{カトラ}双銃のアリア<に手を出す奴なんていないだろうし」

「……………二つ名、自分で名乗っているのか、お前……………？」

道の両端に立つ。

「じゃあ、また明日！」

「ああ。ではな」

別れを言って、背を向ける。
寮に向かって、一人、歩き始める。

二年になり、いつもの風景と化しているやり取りだった。

神崎の見舞いにいったあの日。

サバイバルナイフの異常を見つけた私は、とりあえず超^S能力^S捜査^S研究^R科へ向かった。

異常現象は、あそこに行けば大体説明される。

> 割^Rとなんでも知っているくがキャッチコピーである、超^S能力^S捜査^S研究^R科の教授に尋ねてみたところ、驚愕の事実が明らかに。

私がつっている、父の形見であるサバイバルナイフ。
謎の金属で出来ている、といったが、これは>転招銀<という不思議金属で出来ているとか。

>転招銀<

これは、近くににいる者の^{ステルス}超能力によって、色と性質が変わる金属なのだという。

能力者によって色を転じ、その能力の一端を内部に招く。
故に、>転招銀<。

普段私が持っているときはなんでどんよりとした黒だったのか、とか、いろいろ突っ込みたいところではあったが、しかし、そんなことは大して重要ではなかった。

問題は、なぜ、急にナイフが緋色に変化したか。だ。

病院にいく前までは確かにいつもの色だった。

ということは、原因は病院内にあった、と考えるべきだろう。

最も近くにいた私の^{ステルス}超能力を容易く飲み込んで、ナイフに影響を与えた何かが。

結論から言えば、能力者のせいではなく、>転招銀<と似たようで、全く性質の違う>色金<という金属以外は考えられないとか。

>色金<

超常世界の核物質とも言われる金属。

端的に説明すると、一般人に強力な^{ステルス}超能力を与える金属、らしい。いくつかの種類に分かれているが、一つでも所持した者は強大な力を得ることが出来、それ故、裏の組織や国が動く事もあるとか。

> 転招銀くをこれ程短時間で変化させるには、不思議金属同士の共鳴以外にはありえない、と教えられた。

金属。

あの病院の場で、あの病室の中で、そんな不自然な金属があるとしたら。

かなえさんが持っていたか。
それとも。

神崎に埋め込まれた、弾丸か。

前者であることを祈っていた。

が、状況的に、後者である可能性が高かった。

そして、現在の状況から推察すると。

後者であったと、言わざるをえない。

退院後の、神崎の活躍。

以前から、かなり優秀な人間ではあったが、しかし、まだ常識の範囲内だった。

神崎が人外と呼ぶに相応しい能力（超能力ステルスではなく）を示しはじめたのは、退院から一週間後の銃技の授業である。

百発百中とはまさにあのこと、といったくなるほどの射撃を見せたのだ。

また、この頃から髪と目がさらに赤くなり、今は以前の色とは全く違う、ピンクブロンドの髪と、赤紫色カメリアの目となった。

変化はまだ続いた。

成績優秀と判断され、神崎が依頼を受けられるようになり。
なぜか私とタッグを組むようになり。

私が>真紅クリムゾン・リップのナイフ使いくと呼ばれるようになり。

神崎が>双剣双銃カドラのエリアくと呼ばれるようになり。

そして、二人で武偵ランクAになり。

マスタース教務科が、指名で依頼をまわしてくるようになった。

「槐」

横から声がかかる。

首をまわして声がかかったほうを見ると、教室の扉から覗いている
神崎。

ちいさい身長のせいで、制服を着ていなければ、どこの小学生？と
聞かれてしまいそうだ。

…… もっとも、あえてそんなことをする人間も少ないだろうが。

「神崎か」

言って、立ち上がる。おそらく、いつもの件だろう、とあたりをつ
けて。

ちなみに、今現在は授業中である。

完全に授業妨害となっっているだろうが、誰も何も言わない。

ただ、妙にキラキラした視線が追ってくるだけである。

扉につき、後ろ手に閉めて、教室を出て行く。

「また依頼だつて。今度はAランクだー、とかいってた」

「そうか」

並んで教務科^{マスタース}の部屋まで移動する。
扉を開け、一声断り中に入る。

「ああ。来ましたか」

言つて、近づいてくるのは眼鏡をかけた男性。

「今回の依頼は、集団行方不明、及び拉致監禁事件の調査と、その解決です」

依頼、開始。

第九話（前書き）

一輪の花を愛でよう。

第九話

「この依頼はロンドン市から武偵局へと依頼されたものですので、失敗は許されないと思ってください。荷が重かったら受けないという選択もありますが、どうします?」

「もちろん受けるわよ。Aランクの依頼なんて、ほとんどそんなものだしね」

私の意見も聞かずに返事をする神崎。

いつものことだが、もう少しこちらの事も考えて欲しいものである。

「では、依頼の受託完了ということで。事件の資料がありますので、小会議室のほうへ移動願います」

そついつて、自分は踵を返して奥のほうへ行く男性。

恐らく、資料とやらを取りに行ったのだろう。

「ほら、早くいくわよ」

私の腕を引っ張って移動を促す神崎。

どうでもいいが、最近スキンシップが多くなってきている気がするのは私の気のせいかな?

「今回の事件の概要です」

コピー用紙を4枚ほど渡されて、説明が始まる。

依頼内容は、『集団行方不明事件及び拉致監禁事件の調査と、その解決』である。

何でも、最近になって消息を絶つ人間が続出しているとか。

それも、行方不明者達にはなんの関係性もなく、老若男女区別なし、だそうだ。

これだけならば、ただの集団行方不明事件なのだが。

「問題は、行方不明者が記憶を失った状態で突然現れる、ということですよ」

そういつて、スクリーンに一つの画像を映し出す男性。

スクリーンの中には、縄で縛られ、転がされている複数の人間が。狭く不衛生な小部屋の中で、見た感じの外傷はないように思う。

「この写真を見てもらえれば分かると思いますが、彼らに外傷はありません。まるで抜き取られたかのように、記憶だけがなくなった状態で発見されています」

抜き取られたかのように。

ふむ。能力者の犯行も考えられるわけだ。

「発見した人間は？いつ、どんな状態で発見したのだ」

「発見したのは住所不定無職、いわゆるホームレスと呼ばれる男性です。名前はアラン・ノーバート。この写真の部屋は、彼が寝室としている廃墟のものです」

「……………それって、そいつが犯人なんじゃないの？」

眉をひそめて質問する神崎。

少女として、ホームレスという所に引っ掛かったのだろう。

「いえ、彼にはアリバイがありますので。彼は近隣の住民からかなり好かれていよう、食事の差し入れなども頻繁に行われていたようです。発見の前日も、この部屋に食事を持っていった人間がいます。発見されたのは夕方、彼が日課の散歩から帰って来た時で、発見し、通報してきたのも彼だそうです」

つまり、彼が散歩に出ている数時間の間に、犯人が被害者達を運んだようですね。

そういつて、いったん話を止め、こちらを見る男性。
ここまでで何か質問は、とでも言いたいのだろう。
首を振り、先を続けるように促す。

「現時点で発見されているのは、この写真の7名のみ。残りの行方不明者21名は、依然として消息は掴めていません」

以上です。と話を終える。

具体的なことはあまり分かっていない、ということか。

まあ、いつものことである。私達二人に回されてくるのは、なぜか
こういう依頼が多い。

それでも、解決する糸口は私の隣にいる。

「頼むぞ、神崎」

「完全にあたし任せか！」

「得意の超直感を見せる時だろう?」

にやつ、と笑ってみせると、不満げに、しかし自慢げに顔を赤くする神崎。

基本的に、私達のチームはこんなものだ。

神崎が、持ち前の、もうそれは超能力ステルスの一種として良いのではないか、といったくなるくらいの勘により解決の取っ掛かりを見つけ。

私が調査、立証し。

二人で、犯人を叩きのめす。

「さあ。はじめよう」

「そうね。犯人に風穴あけてやらなくちゃ」

神崎がいつもの決め台詞を口に出す。
では、任務開始だ。

小会議室のドアにむかって歩き出す。と

「待ってください」

説明役の男性が、静止を求めてくる。

「なにか、言い忘れていたことでもあったの?」

首を傾けて聞く神崎。

「い、いえ。そういうわけではないのですが……………」

言いよどむ男性。

やがて、決心したように顔をあげる。

「自分よりずっと年下のあなた達に頼むべきではないのでしょうか……………行方不明者のなかには私の娘も含まれていまして」

思わず、息を飲む。

ということは、つまり記憶をなくして戻ってくる可能性があるということだ。

精神的にかなり辛いだろうに。

「どうか、娘をよろしくお願いします」

どぐん、と、心臓がなる。

また、この言葉である。

なぜ私に頼む。

なぜ、殺人者たる私に、そうでなくとも見も知らぬ他人に、娘のことを頼む。

なぜ……………

「安心して」

神崎の言葉に我にかえる。

「私達二人、依頼の達成率は100パーセントなのよ」

優しい微笑み。しらず、精神が平静に戻っていく。

「あなたの依頼、確かに受託したわ」

ハァー、と息を吐く男性。

見れば、うつすらと笑みをうかべ、目には涙が。

安心したのだろう、座っていた椅子に、より深く腰掛け、目を覆う。

「……………ありがとうございます」

返って来た返事は、少し涙声だった。

「……………大した奴だよ、お前は」

「え？なに？なんか言った？」

なんでもない、と首を振る。

本当に、こいつのこういう面には、素直に脱帽だ。

「？ まあいいわ。じゃあ、まずは発見者のアランなんだかっていうホームレスのところに行くわよ」

「了解」

言葉少なに返す。

神崎の横に立ち、歩きはじめる。
本格的な、調査の開始である。

第九話（後書き）

み
じ
か
い
。

完全に説明回と化してしまいました

第十話（前書き）

罪という言葉の意味を知れ。

第十話

「え、えーと。この間の事について話しゃあいんですかい？」

「あなたは何も話さなくて良いわ。ちょっと部屋の中を見せてもらえればそれでいいの」

目の前の男性にそう言い放つ神崎。

初対面の人間にも全く物怖じした様子はない。

むしろ、もう少し慎みをもてといたくなるレベルである。

「え、それだけでいいんで？おらあ、てつきり根掘り葉掘り聞かれるもんかと思つてやした」

ほつとしたように、快活に笑う男性。

長身に、細身だが貧弱ではない体。

多少くたびれてはいるが、しかし彼の現状を考えると驚くほど清潔な衣服。

端正とはいえないが、人好きのする容姿。

今回の事件の被害者の第一発見者である、アラン・ノーバートである。

正直、何故彼のような人間がホームレスなどやっているのか疑問な人物だ。

自分よりも明らかに年下である私達に対して、全く侮ったような態度をとらず、真摯に接している。

彼が近隣の人々から好かれているというのも納得である。

「では、すまないが失礼する」

「どうぞどうぞ。つつても、おれが勝手に住み着いてるっただけで、おれの家じゃねえんですがね」

確かにそのとおりである。

本来ならばこの建物の所有者がいるはずなのだが、何故彼はいまだにここに住んでいられるのだろうか。

そんなことを考えつつ、しかし私達は別に警察ではないからな、と問題を先送りにする。

写真にあつた、狭く小汚い部屋に着く。

ぼろぼろになった小さい机に、灰色の毛布。擦り切れた本が一冊。

安全ピンや針金、ビニール袋などの細々としたもの。

それらが申し訳程度に配置されていたのだらう部屋の内部は、しかし物は乱雑に隅にどけられ、中心に大きめのスペースが出来ていた。写真通りならばそのスペースに被害者達が縛られ、座らされていたはずである。

「……………ふむ」

見た感じ、この場所に手がかりがあるようには思えない。

やはり、能力者を洗い出したほうが早いのではないだろうか。

そう思つて、声を掛けようとふりむくと、

「……………うーん？」

腕を組み、首をかしげ、難しい顔をした神崎が、そこにいた。何なのだろう。こいつがこんな格好をしていると、酷く滑稽に思えてくるのだが。

「……………うん？なに？」

私の視線に気付いたのか、顔をこちらに向ける。
なにやら、不機嫌そうである。

「ここにいるより能力者を洗い出したほうが良いのではと思ったのだが、どうした？なにか分かったか？」

「……………うーん。何にもわかんない。……………うん。何にもわかんない」

不満そうに、不機嫌そうに言う神崎。

その内容に、少し驚く。

いままでは、必ずと言って良いほどなにかに気がついていた神崎が、何も分からないとは。

同時に、不機嫌そうであることにも納得。

自分の仕事を一つ、果たせていないとでも考えているのだろう。
仕事に関しては、いい加減にはしない奴であるが故に。

「……………あ、そうだ」

と、そこで、横から声がかかる。

みると、片手の握りこぶしをもう片方の手のひらに打ち付けるとい
う、古典的な『思いついたポーズ』をとっているアラン・ノーバー
トが。

「そついやあ、これはまだ言っていなかったことなんですがね……………」
そついつて、首を傾げるアラン。

「どうにも、よくわからねえんですけどね。おれがここに帰つてきたとき、縛られてた連中がぶつぶつ呟いてたことがあるんですよ」

「どんなこと？」

即座に反応する神崎。

こういう切り替えが早いのは、武偵であるからか。

「なんか、教授がどうとか、退学がなんとか、いつてましたね。全員がおんなじ様におんなじことを呟いてましてね。かなり気味が悪かったですよ」

そういつて、おどけて震えてみせるアラン。

しかし、その表情をみるに、本当に不気味がつているようだ。

教授。

その単語だけを聞くと、私にはあの教授おんなしか思い浮かばないのだが。こちらに迷惑ばかりかけ、しかし妙な面で妙に頼りになるあの人。だが、あれは記憶を消すような能力は持っていなかったはずであるし、なにより、あれがこんな、わけの分らないようなことをするとは思えん。

……………研究のためならば、手段を選ばないような人であるが。

「……………ふむ」

全員が同じことを同じように。

まるで人格操作、洗脳のようなものである。

この短期間でこれ程の人間を洗脳する。

やはり、能力者が関与しているようだ。

「……………よし。神崎」

「……………」

「おい。神崎」

「……………」

反応がない。なにか、考え込んでいるようである。

「……………神崎？」

呼んで、あごを掴み、くいつと上に向ける。

「……………え、わ、ちよつ、な、なに!？」

「私はこれから能力者をリスト化して全員の調査を開始しようと思うが、どうだ？」

「わ、分かったから、ちよつ、手、手離してッ!か、顔近い!！」

ぱつと手を離す。

最近編み出した、『安全に神崎の注意を促す方法』である。

「……………ううゝ」

顔を真っ赤にしてこちらを睨んでくる神崎。
そんな顔で凄まれても全く恐怖を感じない。

話を続ける。

「それで？お前はどつする？私としては、いろいろ手伝つて欲しいことがあるのだが」

「……………ばか」

「……………聞こえているが」

「聞こえるようにいったんだもん」

「……………ほう」

「な、なによ。バカにバカつて言つて何が悪いのよこのバカ！」

「何故そんなに罵倒されているのか分からんが、我々のチームの頭脳担当は私なのだがな」

「何よそれ！遠まわしにあたしのこと頭悪いつて言つてんの！？」

「遠まわしではなく、ダイレクトにそう言っている」

「……………けんか撃つてんの？」

「そう見えるか？」

睨みあつ。

私はただ話をしていただけのはずなのに、どうしてこんなことになつてゐるのだろうか。

「……………うわぁ。リアル痴話喧嘩っすね？」

「「違うー!!」」

ふざけたことを言うアランに反論し、再び向き直る。

「神崎。お前には一度言いたかったことがあるのだがな」

「へえ。そうなの。実はあたしもあんたに言いたかったことがあるのよね」

一拍おく。

そして、申し合わせたように口を開く。

「お前は、無駄に偉そうなんだ」

「あんた、無駄に偉そうなのよ!!」

沈黙。

そして、再起動。

「よかるう。ならば競争だ」

「望むところよ！負けたほうが土下座だからね！」

入り口のほうに向かう。

神崎は、まだこの部屋に残るようである。

奴がここで時間を無駄にしているうちに、出来ることをしなくてはな。

「……………仲、いいんですね」

「誰が……！」

……………部屋の中から聞こえてきた声は、無視することにした。

第十話（後書き）

《《けんか撃ってんの？

誤字にあらず。念のため。

第十一話（前書き）

ああ。奇跡の潰える瞬間よ。なんと心躍ることだろう。

第十一話

「全く！なんなのよアイツは！全く！」

狭く小汚い廃墟の中、一人の少女が叫んでいる。
ピンクブロンドの髪、カメリア赤紫色の瞳、小さい体躯。
ロンドン武偵高の制服を身に纏っていないければ、間違いなく小学生に勘違いされるであろう彼女は、今現在、自分のパートナーへの怒りを、衆目はばからず発散しているところだった。

「まあまあ。落ち着いてくだせえよ。お嬢さん」

そう言つて穏やかに少女をなだめようとする男。
よれよれの上着に、これまたくたびれたズボンを履いた、背の高い男だ。

本来ならばただの事件協力者という立ち位置だったはずのこの男が、なぜこんな役回りになっているのだろうか。疑問である。

「なーにが、『お前は、無駄に偉そうなんだ』、よ！あんたのほうが100兆倍偉そうよ！」

自分も相手に同じ事を言っているにもかかわらず、話を蒸し返す少女。

よほど怒りを覚えているらしく、その細い足で、ゲシゲシと壁を蹴り飛ばす。

男の言葉は、完全に無視している。

「いつもいつも気取った話し方しちゃってさ！勝手に行動するなんて日常茶飯事ださ！」

「へえ、そりやまた」

だんだんとただの愚痴になりつつある少女の言葉に、男がこれ以上ないほど適当に返事をする。

先ほどの痴話喧嘩じみた言い合いを聞いていた男からすると、これはただの茶番でしかないのかもしれない。

「……………そのくせ、妙に口調が似合ってたさ。簡単に手柄を立てて来てさ」

「……………へえ、そりやまた」

少女の言葉が、愚痴とは性質の違うものに变化する。
言葉は同じでも、少し驚いた表情をする男。

「……………ホントはすっごく優しくてさ。……………誰よりも、優秀で、さ」

「……………へえ、そりや、また」

いつのまにか、悪口から賛美の言葉に変わっている。

怒りの表情から、悲しみのそれに変わっている少女の顔。

それをみて、男は苦笑する。

やってらんねえ、とでも言うように。

「あーあ。今度こそ、愛想尽かされちゃったかな。……………コンビ、解消されちゃったらどうしよう」

そう言って、ははっ、と笑う。

その顔は、酷く、辛そうなものだった。

「そんなに心配することねえんじやねえですかね」

不意に、そういう男。

「……………どうして？」

応える少女。一応、男は認識はされていたようである。

「そりゃあ、決まってまさあ」

男は、優しい笑みを浮かべて続ける。

「あの兄さんは、お嬢さんに意見を求めていたでしょ。ってことは、お嬢さんが必要としてるって事でしょ」

「……………」

「それに、あれですよ」

反応しない少女にむかって、男は告げる。

「あの兄さん、振り向くとき笑ってましたよ？」

ポカンとした表情をする少女。

次第に、顔に笑みが戻ってくる。

それは、先ほど浮かべた悲しげな、辛そうなものではなく、獲物を目の前にした猫科の大型動物のような、獰猛な笑みだった。

「ふ、ふふふふふ」

顔を下に向け、くつくつと笑う少女。
陰になって、瞳が見えない。

「そう。そうなのね。あのバカ、あたしが怒ってるの見て、笑ってたのね」

いや、そりゃあ違うんじゃないか、というような表情をする男を尻目に、少女は叫ぶ。

「ぜつつつつつたい、土下座させてやる！……！」

叫んで、猛然と駆け出していく少女。
淑女のしの字も見当たらないその姿に、残された男はしばし呆然とする。

そして、くつくつと笑い出す。

先ほどの少女とよく似た笑い方である。

違うのは、顔に浮かんだ愉快そうな表情だけだ。
面白そうに、興味深そうに、呟く。

「そう。それでいい。競い合ってこそ、パートナーだ」

くつくつと笑いながら、続ける。

「彼はきみのパートナーたりえるかな？……………アリア」

ガサガサツ、と、書類の山をかき乱す。

目当てのものを探り出し、そばにあるケースに収める。

そして、また書類の山に挑む。

延々と、その繰り返しである。

「ねーえー。別に勝手に超能力^{うち}捜査研究科の資料覗くのはいいんだけどさー。ちょっとは相手してよー。会うの久しぶりなんだからさー。ねーえー。エンちゃん」

延々と、作業だけを繰り返す。

「ねーえー。無視しないでよー。こっち向いてよー。相手してよー」

延々と、延々と、作業だけを繰り返す。

「……………相手してくんないと、研究成果流出しちゃうよー？」

それはまずい。

「……………なんなんだ」

言って、振り向く。横目で相手を見て、時折、手元に視線を戻す。作業は、やめない。

視線の先にいるのは、外見16歳くらいの、小柄な女性。

白衣を着て、デスクチェアに逆向きで座り、背もたれに腕をまわしている。

白く、肩で切りそろえた髪。かなり整った容姿。丰满な胸部。

どこのアイドルだ、といったくなる彼女は、私が振り向いたことを知ると、にぱっ、と笑みを浮かべる。

「おー。やっと振り向いてくれたー。対エンちゃん用最終兵器、効果は顕在かー」

うんうん、とうなずく彼女。
なにがしたい。

「用がないなら喋りかけるな。気が散る」

「うわー。相変わらず超クール。こんな美少女目の前にして出てくる言葉がそれですかー」

でもそんなところがイイツ、などといって体をくねらせる彼女。
…… 本当に、なにがしたい。

「なんの用なんだ。大体今は実験中のはずだろう。守衛の人間がそう言っていたぞ。……教授」

呼ぶと、につ、と笑って応える彼女。

「実験なんて、キミとボクの間の障害にはならないんだよ、エンちゃん！」

質問に答える。

そう言いたくなるのをぐっところえる。

こいつには何を言っても無駄であるということは、出会って10分で理解している。

「やーん。出会って10分で理解だなんて。そんなにボクのことを思ってくれてたんだねエンちゃん！」

「思考を読むな」

つい突っ込んでしまった私は悪くないと思う。

「しょうがないじゃん。エンちゃんの前になると、興奮しちゃって能力制御が曖昧になっちゃうんだもん」

言って、にしし、と笑う教授。

完全に、確信犯である。

そう、確信犯、だ。

読もうと思つて人の心を読めるのが、教授なのである。

一体いくつ超能力ステルスを持つているのか知らないが、恐らく教授が最もよく使うであろう能力、>精神感応テレパスくだ。

「で、本当に何のようなんだ。こっちは土下座がかかっているのだが」

別に神崎を土下座させたいわけではないが、神崎に土下座をするのは御免被る。

「全くね！エンちゃんを土下座させようなんて、ピンクちゃんは何を考えているんだろうね！憤慨物だよ！」

ホントに全く。エンちゃんにあんなことされて怒るなんて。信じられない。ボクだったらそのまま流れで押し倒してゴールインしてやるのに。……………ああ！だめだよ、エンちゃん！そんな、激しいよ！

テレパス
レトロコグニション
>精神感応くだか>過去視くだか知らんが、なんらかの能力を使つて事情を読み取り、勝手に妄想しだす教授。
残念な美少女である。……………本当に少女かどうかは知らないが。

「失礼だよ、エンちゃん！ちゃんと外見年齢と実年齢は一致してるよ！……………精神年齢はどうか、分からないけどね」

言つて、少し暗い顔をする教授。

……………なんだ？私が悪いのか？

「別に精神年齢が実年齢と一致していないものなどいくらでもいるだろう。私もそうだしな」

言つと、嬉しそうに顔を赤らめる教授。

「…………エンちゃん、優しいから好きだなあ」

「なぜ今の発言でそうなるのか教えて欲しい。今後そうならないように対処する」

「もー。照れちゃってエンちゃんはー」

そう言つて抱きついてこようとする教授をかわし、作業を続ける。

「それで？もうそろそろ教えて欲しいのだが。何のようだ」

「…………ねえ。初めて会ったときのこと、覚えてる？」

急に声のトーンを下げて言う教授。

「ああ。覚えているが。私を見た教授が、いきなり腰を抜かしていたな」

「うん、そうだね」

日頃の仕返しも込めて、からかうように言つてみたが、素でかわされてしまった。

「いまでも思い出すよ。記憶を読んで、最初に見えたのが血の海だったんだもん」

「……………そうか」

「ボクもなかなかの人生送ってきていると思ってたけど、全然だつたんだなあ、って思ったのが最初」

「……………そうか」

「生まれなおした、っていう人間もはじめて見たし、エンちゃんとは初めてだらけだね！」

「微妙に勘違いされそうなことを言うな」

すかさず突っ込む。

ここは言っておかないと、いつか外堀から埋められていた、なんてことになりかねん。

「……………もうなってるけどね」

不吉な言葉は、無視した。

「……………それで？どうしたというのだ」

もういい加減に本題に入ってもらいたい。

「うん、真剣なパートに入るから、よく聞いてねエンちゃん。茶化しちゃダメだよ」

いつもの教授とは思えないほど深刻そうな様子に、一旦作業を止め、顔を正面に向ける。

ありがと、と礼をいい、教授が口を開く。

「あなたが好きです。桜坂・イスカンドル・槐」

言って、にっこり笑う教授。

「ああ、別に返事をして欲しいわけじゃないよ？そりゃ、受け入れてもらえたら嬉しいけど」

うまく働かない頭で、応える。

「……では、なぜいったのだ」

「うん」

答えて、何かを待つような仕草をする教授。
そして、言う。

「ここで言うておかないと、ね。もう、当分会えなそうだから」

同時に聞こえてくる、誰かが走ってくるような音。
資料室の部屋が開かれ、職員が入ってくる。

「桜坂さん！！事件の犯人から、連絡が入りました！！！！」

教授を見る。

その表情は、悲しそうな、笑みだった。

第十二話（前書き）

底なし沼？笑わせる。私の人生そのものが、底なしだ。

第十二話

『あ、あー。ロンドン武偵高の愚民共。この僕の華麗なる美声が聞こえているかな?』

職員に呼ばれ、超能力捜査研究科から通信科コネクトの校舎へと走った私が最初に耳にしたのは、こんなふざけた音声だった。

通信機器が所狭しと並べられた室内で、何人かの生徒が作業を開始している。

一人は応答。一人は録音。残りは犯人の位置特定のための逆探知、といったところか。

まだ、神崎は到着してはいないようだった。

「先ほどから聞こえています。自己紹介も何度もされました。要件は何なんです?」

平静を保とうとするが、隠し切れない苛立ちが滲んでいる応答係の少女。

通信科コネクトとしては失格なのではないか、と思ってしまう。
しかし、次の回答を聞いてそんな気持ちも吹っ飛ぶ。

『そこに失踪事件の担当者は来ているのかい? 来ていないならまだ続けさせてもらうよ。君達も僕の声が聞けて嬉しいだろう?』

……なんなんだこいつは。ナルシストか?

恐らくこんな調子で何度も何度も会話がループしているのだろう、後ろのほうで、またか、と呟く声がする。

それに、こいつが言うとおりに美声だったのならまだしも、聞こえてくるのはカエルが潰れてひしゃげた様な状態で鳴いているかのよ

うな不快な声。

正直、これ以上喋らないで欲しい。

「担当者だが」

マイクをもらって、短く返答する。

こちらを見て、ほっ、とため息をつく応答役。

よほど嫌だったのだろう。まるで救世主が来たかのような表情である。

『ああ、やっつっつと現れたな愚民め！！いつまで僕を待たせるのだ！！』

早口でいうカエル。もとい犯人。

『一連の失踪事件は知っているな？その事件は僕が起こしたものののだ！！』

どーん、とでも背景に付きそうな勢いで自白し始めるカエル。もとい犯人。

こんな奴始めてである。

『どうだ？全く手がかりがないだろう！？完璧な僕が行う完璧な所業！！崇めることを許すぞ！！』

フウハハハハハハハ！と、小物臭のする高笑いを始めるカエル……カエル。

もう帰ってもいいだろうか、と、目線で応答役の少女に尋ねる。帰ってくるのは涙混じりの懇願の表情。卑怯である。

「……………それで？用件は？」

仕方なく尋ねる。

こんな奴のために資料の山をひっくり返していたのだと思うと、なにかやるせない気持ちになってくる。

『そうだな。まずは僕のことだ。便宜上、指揮者^{コンダクター}とも呼ぶがいい。』

高笑いをやめ、質問に応じる力エル。

威厳たっぷりと言っているつもりなのだろうが、蛙声のせいで台無しである。

「先日開放した7名の愚民を覚えているかな？」

話が中心に近づいてきた。

萎えた感情を集中しなおし、カエルの声に耳を傾ける。

「奴らはいわゆる、見せしめだ。」

「僕のを要求を聞かなければ、他の愚民全員がああなつて帰ってくる
 と思え。」

「しかもそれでは終わらん。要求を聞き遂げられるまで、僕はこの事件を続行する。」

「しかし僕は慈悲深いのでな。要求が聞き遂げられたら、愚民共の状態をもとに戻してやろうではないか。

「寛大な僕に感謝したまえ。フウハハハハハハハ！！！！！」

再び高笑いを始めるカエル。

最初と変わらない態度ではあるが、私はこいつの印象を上方修正する。

要求を聞けば人質を元に戻す、という逃げ道を用意することによって、こちらの意思を弱くする算段なのだろう。拉致事件としてはポピュラーな手法だが、厄介なのは奴が能力者であるということ。

人質がこちらに戻ってきたところで、彼らの記憶は奴のもの。つまり、事件が長引けば長引くほど、奴には記憶という人質が増えていくことになる。

「…………その要求というのはなんだ？金か？」

とにかく、今は奴から情報を得ることが先決である。

出来るだけ時間を稼ぎ、会話を長引かせようと、こちらから話しかける。

『金？金だと？この高貴な僕がそんなものを欲しがるとでも思うのか？』

どうやら、奴の狙いは金ではないらしい。

厄介である。

「金でないのなら、なにが欲しいのだ」

質問する。

カエルは、長々と間を取り、尊大に、言う。

『ホームズの血筋だ。神崎・H・アリアを渡せ』

思考が、一瞬停止する。

神、崎？何故こいつが、神崎を欲しがる？

『断るか？それでもいいぞ。愚民共がどうなってもいいなら、断るがいい！！！！』

フハハハハハ！！と笑い出すカエル。

その腹立たしい声に押されて、口が勝手に動いた。

「何故貴様は神崎を要求する？」

声が変わらなかったことに安堵する。

同時に、こんな時でもいつもの調子を失わない自分に苦笑。

『決まっているだろう！！復学するためだ！！！！』

「……………は？」

またわけの分らないことを言い出すカエル。

いい加減にして欲しい。そろそろ我慢の限界である。

『僕は復学する！！戻るんだ！！あの場所に！！そ、その、そのために、ホームズの、ま、末裔が、必要なんだ！！……………畜生、奴ら馬鹿にしゃがって！ぼ、僕を、馬鹿にして！！許さないぞ、ダ、研イグナティウス鑽派の奴らも、主戦派の奴らも、イ・ウー全て、僕が、操ってやるんだ！！そう、そうだ。操ってやるんだ……………』

いきなり激昂し、次にぶつぶつと呟きだすカエル。

その声には、先ほどの尊大な様子はまるでない。

痼癢を起こした子供のように、延々と呪詛を吐き続ける。

やがて、はっ、と気付いたかのように、こちらに向けて話し出す。

『期日は今日の夜12時！！あの廃墟だ！！ホームズ一人で来させる！！いいな！！』

そう言つて、唐突に通信が切られる。

コネク
通信科の部屋に、静寂が満ちる。

神崎一人で、と言っていたな。

奴も神崎の戦闘力を知らないわけではないだろう。

手がかりを一つも残さないほど抜け目のない奴である。何らかの對抗策を用意している筈だ。

ならば、やはり神崎には行かせないほうがいいだろう。

人質には申し訳ないが、奴を捕らえた後、記憶を戻させたほうがいい。

そうと決まれば、と、私は録音していた機械を止めさせ、振り向かずと言った。

「ここにいる全員に通達。今の内容を神崎に伝えるな。この意味は分かるな？」

（あつ！ちよつ、お、桜坂さん！）

「あのカエルは私が捕まえる。心配する必要はない」

（桜坂さん！後ろ！後ろ見てください！！）

「もう一度言う。神崎には伝えるな」

「桜坂さん！！後ろ！！！！」

無声音で話しかけてきていた録音担当の男子が、声を張り上げる。
先刻から何なのだろう。後ろになにかあるのだろうか？
そう思って、振り向く。

そこには

呆然とした顔の、神崎が立っていた。

「ッ!!」

驚きに瞠目する。

いつからだ。いつから聞いていた？

もし後半の会話を聞かれていたなら、こいつは一人でも廃墟に行きかねん。

それは、それだけはまずい。

「……………神崎」

「……………槐」

呆然としたまま、私の名を呼ぶ神崎。

心なしか、震えているようにも見える。

「……………神崎。いつから聞いていた？」

焦りながら、尋ねる。

こんなときにもいつもの調子である私の声帯に感謝。

「……………槐」

質問に答えず、呆然としたまま言う神崎。

顔が、青白くなっていつている。

……………なんだ？やはり聞かれたか。その重圧で青くなっている、のか？

「……………槐。あたし達、パートナー、よね？」

いきなり、関係のないことを尋ねてくる神崎。

当たり前前のことを聞くな。そういう思いが表情にでてしまう。

「質問に答える。いつから聞いていた」

「そつちこそ質問に答えなさいよ！！風穴あけるわよ！！」

ガシャシャッ、と、神崎がガバメントを構える。
妙に目が据わっている。いつもの感じではない。

「……………どういづつもりだ」

質問する。自然と、声が低くなる。

「質問に、答えなさい！！」

言って、発砲する神崎。

ガガン！！と銃声。

銃口は、完全にこちらを向いていた。

無意識にかわし、無意識に駆け抜け。

気付けば、神崎を床に押し倒し、ナイフを突きつけている自分がいた。

「ツツツ！！！」

反射的に、殺人者としての面が顔を出してしまった。
恐らくは、神崎の殺気に反応してしまったか。

バツ、と離れ、神崎を見ると。

床に転がったまま、信じられない、という表情で、こちらを凝視していた。

そして、その瞳に溜まっていく涙。

ゆっくりと立ち上がり、言う。

「…………そう。やっぱりそうだったのね。パートナーなんて思ってたの、あたしだけだったんだ」

辛そうに、悲しそうに、切なそうに。
涙声で言う神崎。

なにを言っているんだ貴様は。
そういう前に、神崎が部屋を出て行く。

そして、再び戻る静寂。

先ほどより、空気が沈んでいるような気がする。

「…………神崎は、いつからここに來ていた？」

「っあ！え、えと、桜坂さんが録音機器を止めた辺りからです！」

私の問いに、はっ、としたように答える誰か。
誰なのかは、認識できなかった。

「…………では、奴との会話は聞かれていなかったわけか」

呟く。その声に応じるように、聞いてくる誰か。

「あ、あの。神崎さんに、伝えたほうが、いいんじゃない……」

発言したものを睨む。

ッ！と息を飲む誰か。

周りをつまぐ認識できないまま、言う。

「伝えれば、あいつは多分一人で犯人のところに向かうだろう。それでは意味がない」

それだけ言って、部屋を出る。

「……………不器用な人だな」

「ええ、ほんとに」

聞こえてきた声は、声として認識できなかった。

翌日。

犯人が指定した廃墟に、当然神崎が赴くことは無く。
その代償としてか、残りの失踪者21名のうち、7名が、傷だらけ
の状態で発見された。

第十三話（前書き）

周りを見渡せ。そこに、お望み通りの地獄がある。

第十三話

代償。

犠牲。

対価。

私の判断で、私の独断で、傷ついて返ってきた7名の人間。犯人からの警告。恐らく、次に返されてくる人間は、より傷ついた状態で返ってくるだろう。

年齢も性別も一切考慮されず、等しく平等に、切られ、焼かれ、擦られ。

記憶をなくして、戻ってくるのだろう。

私は、何をしていたのだろうか？

人質には悪いが、犯人を捕らえた後、記憶を戻させたほうがいい？被害者のことを全く考慮せず、ただただ犯人を捕まえることを前提とした、傲慢な考え。

自分の手柄さえ立てられればいいという、最悪の考え。

私は、何をしていたのだろうか？

事件を競争と見立て、神崎と協力もせず。

自分の力ならば人を救えると、手前勝手な考えを持ち。

結局、こうして犠牲となるものが増えていく。

私は、何をしていたのだろうか？

生まれ変わったと、いい気になり。

自分の本性を、周りに知られないよう押し隠し。

一般人のような振りをして、一般人のような夢を持ち。

自分が>黒い正義<であった事实に、目を瞑り。

そう。私の本質は、殺人者なのだ。

やはり、どうしようもなく、殺人者なのだ。

殺人を通して、正義を貫き。

殺人を通して、意志を貫き。

殺人を通して、自己存在を確立し。

ずっと、そうして生きてきた。

いままでは、だから、ちよっとした間違いだったのだろう。
温い家族愛に身を投じ。緩い仲間意識に浸りつくし。

暖かい世界に、慣れきった。

もう、いいだろう。

もう、休暇は終わりにしよう。

通常運行開始。

通常営業開始。

通常殺人、開始。

「^{マスタース}教務科が手を出すって、どういう事!!?」

バンツ、と、テーブルを叩く音が周囲に響く。

人が10人ほど入れる小部屋の中、一人の少女が、男性にむかって吠え掛かっている。

部屋の中にいるのは3人の人間。

ピンクブロンドの髪を持つ、先ほど叫んだ小柄な少女。

他の二人より年齢が上であると思われる、教師然とした男。

唯一椅子に座り、腕を組みながら顔を俯けている、紅い髪を持つ少年。

「さつき説明したとおりだ。お前らが^{インターン}中学生である以上、一般人に被害者が複数出ているこの状況は荷が重いと判断された。よって、^{マスタース}教務科も動く。それだけだ」

「この依頼はあたし達が受けたはずよ!!」

「そのとおり。だから別に手を引けとは言わん。ただ手を出すと言っているだけだ」

「ツツツツ!!」

暖簾に腕押し。ぬかに釘。いくら言っても引こうとしない教師に痺れを切らしたのか、少女が少年の方に振り向く。振り向いてから、はっとしたように顔を逸らす。まるで、いやなことでも思い出したかのように。少女が振り向いた意図を理解したのか、男性が少年に話しかける。

「桜坂。お前はどつだ。なにかあるか？」

「……………」

教師の呼びかけに、しばし沈黙。
やがて、口を開く少年。

「いや。異論はない。教務科マスターズの協力が得られるなら、それはそれだ」
「なっ！！」

少年の回答に目を見開く少女。

信じられないものでも見たかのような顔をしている。
驚いたのは同じらしく、男性が少年に問いかける。

「……………なんだ、桜坂。お前らしくもない答えだが」

「実益を考えた結果だ。それに……………」

もう、すぐ終わるのでな、と、ぼそりと呟く少年。

少年らしからぬ態度に、一瞬疑問に感じる男性。が、いつものように依頼が終わらせられなくて落ち込んででもいるのだろつと判断し、

「ともかく、そういうことだ」

そういつて、小部屋から出て行く。

残ったのは、依然として椅子に座り続ける少年と、少年を睨みつける少女。

「……………」

「……………」

不意に、少年が立ち上がる。

ゆらっ、とふらつき、そのままドアへと向かう。
と、そこで少年に声がかかる。

「あんだ、びびってんの？」

少女の刺すような声に、すっ、と止まる少年。

「被害者が出て、びびってんの？」

再び尋ねる少女。 答えない少年。

そのまま、ただ沈黙だけが部屋を支配しようとしていたとき、少年
が口を開く。

「……………神崎。正義の定義とは、なんだと思う？」

「……………は？」

いきなり、わけの分からないことを言い出す少年。

質問に質問で返され、さらにその内容も支離滅裂。

はぐらかされたと思ったのか、少女は少年を睨みつけ、ドアを蹴破るようにして部屋から出て行く。

一人残った少年。

少年の口が、声を出さずに動く。

読唇術に長けたものならば読み取れたかもしれないその言葉とともに、少年も立ち上がり、部屋を出て行った。

「フハ、フウハッハハハハハハハハハハ！」

深夜。一つの廃墟に笑い声が響く。同時に鳴る、ピチン！という音。まるで壊れたビデオレコーダーのように、繰り返し繰り返しなる音。繰り返し繰り返し響く笑い声。

何度も何度も繰り返し返され、不意に、ぴたつと止まる音。そして、ドゴツ、という、誰かが何かを蹴り飛ばしたような音が響く。

「クソッ！ホームズの奴め！今日も来やがらねえ！！」

毒づく声。潰れたカエルが無理矢理喋っているような声で、ひとしきり喚いた後、続けて、ピチン！という音が鳴り続ける。

元々薄汚れた床の上に、ぱたたつ、と落ちる液体。ピチン！という音が鳴るたびに、ぱたたつ、と液体が落ちる。

ピチン！ ぱたたつ フハハハハ！！ ピチン！ ぱたたつ

フハ、フハハハハ！！

ピチン！ ぱたたつ フ、フハハハハ！！ ピチン！ ぱたたつ
クフ、フハハハハ！！

ピチン！ ぱたたつ フウハハハハ！！ ピチン！ ぱたたつ フ
ハハハハ！！

ピチン！ ぱたたつ フハハハハ！！ ピチン！ ぱたたつ フハ
ハハハ！！

音が続き、再び不意に止まり、ドゴツ、という音がする。

「ふう。今夜はこんなものか」

言って額に浮いた汗をぬぐう、カエル声の主。

赤地に金糸で装飾をつけた、馬鹿みたいに派手なマント。

肥満体であるといえる体つき。

不自然に、そこだけ人工物であるかのように整った顔。

「ふん。これだけやっておけば奴も態度を変えるだろう」

目の前をみて、満足そうに言う彼。

彼の前には、今しがた自分で作り上げた、地獄が広がっていた。

背の皮を裂かれ、流れ出た血が体を伝い、床に流れ落ちている、身動き一つしない7つの人影。

7人分の血が流れ出し、混ざり合い、あたかも血の池のようになった廃墟。

へたをしなくても、このままだと朝には全員、冷たい肉塊と化しているだろう彼らをみても、男の表情は変わらない。

まるで、わざと壊したおもちゃを見ている子供のようにである。

「さあて。では、そろそろ戻るとするか」

そういつて、惨状に背を向け立ち去ろうとする男。

男に追従する、7つの人影。ぐらりぐらりと歩くその姿は、まるで出来損ないのロボットか、人形のようにである。

「ふうむ。後7体になってしまったか。一応、補充しておいたほうがいいかな」

思案しながら歩く男。

男についていく人影たち。

彼らが廃墟の出口から出ようとした、その時。

「ドコへいこうというのだ」

平坦な声が、背後から呼びかけた。

同時に起こる暴風。

彼らに吹きつけるように進んだそれらは、しかし不自然に8人を避け、彼らの前方に吹きぬける。

後ろを向き、にやりと笑った男は、言う。

「脅しなら、もっと能力制御がうまくなってからやるんだな」

男が手を振り上げ、指揮者のように構える。と、腰を落とし構える周囲の7人。先ほどの出来損ないのロボットのような動きからは想像できない、隙のない構えである。

「脅し？」

対して、背後から声を掛けた側。

黒いコートを着て、フードを目深に被った格好。

声でかろうじて少年だと推察できるが、それ以外は全く外見が分からない。

赤黒く染まったサバイバルナイフを右手に持ち、ぶらりと両腕を下げている。

わずかに顔を上げ、言う。

「脅しではないさ。イワバ単なる………フィールド作りだ」

少年の言葉とともに、廃墟の出口前に、ゴォッ！と風が集まり、

竜巻が、形成される。

「ほう？」

すぐ後ろで出来た竜巻に、

興味深そうな声を上げる男。

余裕そうな態度を崩すことなく続ける。

「フィールド？なんのフィールドだ？貴様、声からしてこの間僕の対応をした事件担当者だろう。この後はどうするつもりなのかな？」

にやにやと、いやらしい笑みを浮かべ言う。

「この7人を見るがいい！！」

言われて、わずかに動くフード。

その動きを悟り、勝ち誇ったかのように宣告する。

「こいつらは貴様が馬鹿みたいに苦労して助け出そうとした一般人だぞ！こいつらを傷つけるわけにはいくまい？そして貴様ら武偵は犯人を殺すことが出来ない！！さあ、どうするのかね！？」

フウハハハハハハ！と高笑いを始める男。

しばらく笑い続け、反応がないことに気付き、得意げに言う。

「なんだ？悔しくて声も出ないか？土下座して謝れば見逃してやるぞ！！」

その言葉に反応したかのように、一歩踏み出す黒コート。

「……………オレは、サイキン思ってたんだが、な」

相変わらずの平坦な声に、顔をゆがめる男。
男を見てもいないように、ぼそつと呟く黒コート。

「ナゼ、犯人ヲ殺シテハイケナインダ？」

第十三話（後書き）

感想、アドバイス等、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7326y/>

緋弾のアリア 征服王の系譜

2012年1月5日19時15分発行